

ISM メーリングリスト過去ログ

Ism-study.21~ism-study.40

[ism-study.21] Re: On Labor Power, HIROMATU etc.	1
[ism-study.22] Re^4: On the "Person" etc. (2).....	3
[ism-study.23] Re: On the "Person" etc.	4
[ism-study.24] Re^3: On the "Person" etc.	5
[ism-study.25] Re: On "New Liberalism" etc.	5
[ism-study.26] Re:.....	6
[ism-study.27] Re:.....	8
[ism-study.28] A Confirmation About Person	8
[ism-study.29] An Answer To 3 Questions.....	10
[ism-study.30] Re: A Confirmation About Person.....	15
[ism-study.31] Re: An Answer To 3 Questions	16
[ism-study.32] Re: On "New Liberalism" etc.	19
[ism-study.33] Re^2: A Confirmation About Person.....	20
[ism-study.34] Re: Re^2: A Confirmation About Person	24
[ism-study.35] Re: Re^2: A Confirmation About Person	27
[ism-study.36] Re^2: An Answer To 3 Questions	28
[ism-study.37] Re^4: A Confirmation About Person.....	29
[ism-study.38] Re^6: On "New Liberalism" etc.	31
[ism-study.39] Re: Re^4: A Confirmation About Person	34
[ism-study.40] Re^6: A Confirmation About Person.....	36

[ism-study.21] Re: On Labor Power, HIROMATU etc.

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/03 12:51:24
修正日時： —

元発言

表題： [ism-study.19] Re: On the "Person" etc.
投稿者： 窪西 保人
投稿日時： 1999/08/02 23:49:50

コメント

コメントはありません。

窪西君, ISM 研究会の皆さん, 今井です。ようやく俺と神山さん以外の方が投稿してくださったので, ホッとしています。

>自分でも何を言ってるのかよく分かつ
>てないので, 意味不明なばあいは無視してください。

こちらこそ, 今一つよくわからんところなので, どんどんご批判ください。

>このばあいの「人格」とはようするに労働能力のことだと考えてよいのではよ
>うか? よく分かりません。

厳密に言うと、ちょっと違うと思います。労働（能）力の定義をもう一度確認してみましょう。――

「われわれが労働力または労働能力と言うのは、一人の人間〔ein Mensch＝個体的人間、人間個体〕の肉体的すなわち生命的な〔＝生きている〕人格性の中に実存しているような、そしてどの種の使用価値を生産する時にもそのつど運動させるような、肉体的・精神的諸力能の総体のことである〔Unter Arbeitskraft oder Arbeitsvermögen verstehen wir den Inbegriff der physischen und geistigen Fähigkeiten, die in der Leiblichkeit, der lebendigen Persönlichkeit eines Menschen existieren und die er in Bewegung setzt, so oft er Gebrauchswerte irgend einer Art producirt〕」(S.183)。

労働能力は対象的に（Kraftとして）把握された自己としての人間です。これに対して、人格（類的本質）は自己的に把握された自己なのです。と、まあ、抽象的なことを言っても仕方ありません。具体的に考えてみましょう。

まず、個別的な力能について考えてみましょう。コップを持ち上げる際には、様々な肉体的・精神的力能が発揮されます。けれども、そのひとつ一つは単なる物理的・化学的なものではないでしょうか？ 筋肉が動く時、また大脳が動く時、その個々の運動は、物理的・化学的な運動であるという点では、水が流れる運動、風が吹く運動とどこが違うのでしょうか？ そのような対象的な運動として現れる力能は対象的自然の力能とどこが違うのでしょうか？

次に、このような力能の総体について考えてみましょう。物理的・化学的な運動をいくら集めても、それが物理的・化学的な運動であるということに変わりはありません。問題はこれらの諸力能を総体として統括している主体は何かということになります。それが自己なのです。力（Kraft）として把握される限りでの人間と、自己（Selbst）として把握される限りでの人間。総体を総体ならしめている主体が自己なのです。だからこそ、上の定義でマルクスは“労働能力は人格性のことだ”と言わずに、“労働能力は人格性の中に実存している諸力能の総体だ”と言っているわけです。

>労働者は目的意識的にモノをつくりますが、（われわれの社会においては）目

>的意識的に社会をつくってるわけではないですね。

生産関係は何よりもまず意識から独立に形成されてしまっています。しかしまた、生産関係は交換過程として自覚的に形成され直すわけです。社会契約論流の社会形成はこれを政治的に翻訳したものです。実際にまた、今日でも社会は政治的な社会としては民主的な選挙によって形成されているわけです。

>広松理論を批判するばあい、ペルソナにたいする「労働する人格」の先行性と
>ともに、ペルソナの世界の非完結性を言うことが必要だともいいます。

正におっしゃる通りです。但し、――これが厄介なのですが――、廣松さんは、一方では、資本主義的生産を捨象して単純な商品流通しか考察しないから、資本主義的生産を完結した世界として把握してしまい、しかしこれとは全く逆に、他方では、資本主義的生産（階級社会）のイメージでしか単純な商品流通を考察しないから、単純商品流通の現象を総て仮象として把握してしまうのです。こうして、廣松さんは、単純な商品流通を資本の生産過程（階級社会）の仮象として捉えてしまっているのです。廣松さんは、一方では資本主義的生産を捨象し、しかし今度は単純な商品流通を考察する時には、他方では単純商品流通を捨象してしまうのです。だから、廣松さんは殆ど専ら商品論・貨幣論しか論じていないのにも拘わらず、当の商品論・貨幣論を正しく掴まえることができないのです。こうして、廣松さんの脳髓の中では資本主義的生産が単純商品流通に、そして逆に単純商品流通が資本主義的生産に相互的に転回してしまっているのだと思います。

>広松理論

>のばあい、価値実体論で抽象的労働の対象化をマルクスが言っているのはいわば
>前振り（あとで“錯視”であったことが分かるような前振り）であって、商談に
>なると価値が消えてしまい、労働論というハシゴを外してペルソナの世界がひとり
>りでぐるぐる回りしてしまうわけですね。

そういうことです。解りやすく整理していただき、どうもありがとうございます。俺が[jism-study.15] Re^2: On the "Person" etc." (1999/08/02

11:57) の中で、――

>廣松さんにとっては、単純商品流通はそもそも仮象
>です

>廣松さんは
>単純商品流通の諸表象を単なる仮象として捉える

と述べているのも、この点と関わっています。一言補足しておく、廣松さんは「単純流通の諸表象」だけではなく、単純流通の現実的な現象（物象化、商品価値など）までも仮象にしてしまうわけですね。

[ism-study.22] Re ^ 4: On the "Person" etc. (2)

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/03 14:22:23
修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.18] Re: Re^2: On the "Person" etc.
投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/02 23:12:25

コメント

コメントはありません。

神山さん、ISM 研究会の皆さん、今井です。

>ま、意識なんて言葉を使うと意識先にありき、みたいなので、こういい
>ましょう。

神山さんはよくご承知のように、こういう誤解を受けかねないから、俺は類的本質あるいは労働する人格という名辞を用いているのです。神山さんのよう

にこの点に精通した方が使う限りでは余り問題がないのかもしれませんが、俺のような素人が使うと、一方では言葉に引き摺られて、自分自身の問題意識を制約してしまうことになりかねないし、また他方では第三者に対してうまく説明する自信がないから、思わぬ誤解を招きかねないわけです。あくまでも自己意識そのものではなく、自己意識する本質的存在（Wesen）であるということ、俺は常に確認したいと思います。尤も、このことさえ弁えておけば、俺が用いる“類的本質”あるいは“労働する人格”と神山さんが用いる「自由な自己意識」とは通訳可能ですし、今後はそのような通訳可能なものとして共通理解していきましょう。

>「この事実上の関係」は文字通りの事実上の関係なのかなあ、とおもいま
>す。

「文字通りの事実上の関係」というのがちょっとよく解りませんが、もちろん、意識から独立して結んでいる限りでの生産関係ではありません。あくまでもここでは、マルクスは相互的承認について事実的關係とその法的形態（契約形式）とを区別しているわけです。ですから、神山さんがおっしゃるように、――

>「後には契約等々で」との対比で、「事実上」といわれているのではな
>いでしょうか。

というわけです。契約という法的形式に先行する事実的な関係です。この事実的な関係はもちろん相互的承認を要件にするのであって、決して無自覚的な関係ではありません。で、契約という法的形式は、法制度的な整備（立法機関が実定法を作成するなり、司法機関が慣習法を作成するなりということ）に先行します。すなわち、――

事実的關係→法的關係→法律体系の下での法的關係

>「私的所有者としての相互的承認」なら、それ自体法的な、非共同体
>的、非自然発生的、非人格依存的な振舞い、共同体を想定しない自由な振

>舞い方（私的生産の私的交換としての振舞い）だとおもわれますから。

「私的所有者としての相互的承認」なら、それ自体法的な」というのは現在のシステムにおいてはその通りですが、それが法的になったのは歴史的な過程の産物であるわけです。

[ism-study.23] Re: On the "Person" etc.

投稿者： 神山 義治
 投稿日時： 1999/08/03 14:52:22
 修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.19] Re: On the "Person" etc.
 投稿者： 窪西 保人
 投稿日時： 1999/08/02 23:49:50

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.24] Re^3: On the "Person" etc.	今井 祐之	1999/08/03 15:41:54

窪西さん、皆さん、今日は。

>> 「自由な自己意識」（俺の用語法では“労働する人格”，あるいは
 >> “類的本質”）と言うべきでしょう。これは商品の人格化とは異なって，交換
 >> 過程で形成されるものではありませんよね？
 >
 > このばあいの「人格」とはようするに労働能力のことだと考えてよいのでは
 > うか？ よく分かりません。

今井さんの広松批判の文脈をさしおいていえば、（今井さんにかみつかれるかもしれませんが）不正確を承知で、平たくいえば、個々の労働能力そのものではなくて、それが社会的なコミュニケーションの中で、社会的分業に割当てられている姿、要するに、生産共同体である社会のメンバーシップのことです。社会的意思を介して、構成員として振舞うありようだとおもいます。

近代社会では、自由な契約主体（経済的には労働力商品の所有者）としての労働者をさすのではないのでしょうか。人格に対して、労働能力はその客体、物件（物象）として分裂してます。

次の窪西さんの発言、分りやすいです（深く考えると疎外論の基本の難しい問題が顔出しますが）。

> 労働者は目的意識的にモノをつくりますが、（われわれの社会においては）目
 > 的意識的に社会をつくってるわけではないですよ。社会関係を形成すべく運動
 > せざるをえないようなモノをつくることによって、無意識的に社会を形成してい
 > るというか。

労働は合目的的だが、それもいきなり形態が完成するのではないから、労働者は目的意識性を否定され、資本の側に移っています。社会もいきなり完成せず、目的意識的に、「さあ、地球上の万人よ、てをとりあって、しゃかいをつくりましょう」なんて設計図を書いてつくるわけじゃありません。合目的的であるがゆえに、他の主体性の目的に分裂的に、自己否定的に目的性を疎外されて実現せざるを得ず、これは合目的的な社会の完成のための「通過点」なわけです。

> 無人島の労働は社会をつくらないのであって、労働が社会を形成するためには、
 > 生産者がある一定の社会的分業の体制のもとで働いていることが前提になります
 > ね。商品生産社会のもとでは、労働の社会性はモノの社会性として、（他人あて
 > の使用価値であるという）使用価値の社会的性格と、抽象的労働の支出としての
 > 性格の2面で現われるわけですけども。

大きくいうと、社会を創らないけれど社会を創る、そういう在り方が、社会性、人格的媒介性の否定として、社会を創る物象的な関連でしょう。

[ism-study.24] Re ^3: On the "Person" etc.

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/03 15:41:54
修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.23] Re: On the "Person" etc.
投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/03 14:52:22

コメント

コメントはありません。

神山さん、ISM 研究会の皆さん、今井です。

神山さん、解りやすい説明、どうもありがとうございます。神山さんの説明を受けて、ちょっと、俺自身の説明を解り易い（と俺が思い込んでいる）例で補足しておきます（前のコメントでこの例を出すつもりだったのですが、その例を導出するための難しい屁理屈をこねているうちにすっかり書き忘れてしまいました。そのため、前のコメントはちょっと意味不明だったかもしれません。失礼いたしました）。

俺は“[ism-study.21] Re: On Labor Power, HIROMATU etc.”
(1999/08/03 12:51) の中で次のように述べました。——

>労働能力は対象的に（Kraft として）把握された自己としての人間です。こ
>れに対して、人格（類的本質）は自己的に把握された自己〔としての人間〕
>なのです。

また、神山さんは“[ism-study.23] Re: On the "Person" etc.”
(1999/08/03 14:52) の中で次のように述べています。——

>人格に対して、労働能力はその客
>体、物件（物象）として分裂してます。

この二つの発言を総合して解りやすく言うと、——

近代的個人は、
対象を売ることはできるが、自己そのものを売ることはできない
|
従って、
↓
労働力を売ることはできるが、人格を売ることはできない

——こんなところでどうでしょうか。

[ism-study.25] Re: On "New Liberalism" etc.

投稿者： 窪西 保人
投稿日時： 1999/08/04 12:33:15
修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.13] Re^4: On "New Liberalism" etc.
投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/07/28 20:25:35

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.32] Re: On "New Liberalism" etc.	神山 義治	1999/08/05 12:22:04
[ism-study.38] Re^6: On "New Liberalism" etc.	今井 祐之	1999/08/06 09:53:03

今井さんと神山さん、「労働する人格」についてのお返事ありがとうございます。おかげさまで頭の中で区別ができてきました。

新自由主義についてですが、これは自由主義といえるのだろうかと思ったりします。新自由主義のばあい、自由は効率性達成のための手段にすぎず、目的ではないように思うのですけど。

また新自由主義は、経済成長主義という点でケインズ主義と同じだと言えるかとおもいます。といっても、資本蓄積しない資本主義など無いわけだから、資本主義は経済成長主義を捨てられないんですけど。古典派も経済成長主義ですし。

「自由・平等・所有」に続けてマルクスは「ベンサム」を並べてますが、ぼくはこの「ベンサム」が妙にひっかかります。前の3つは商品経済を自然権から基礎づけようとするものですけど、予定調和論はこうすれば世の中うまくいくという話ですよ。スミスとかヒュームとかの経済的自由主義は、基本的に予定調和論だとおもいます。

福祉国家論にしろ新自由主義にしろ、社会のタテマエについての意識が薄く、世の中うまくいってればいいじゃないかというノリがあるわけですね。複雑系経済学に至ると、個人の自由など幻想だと言って新古典派を攻撃する。でも市場というシステムでしか世の中うまくいかない（みたい）だから、これが浅知恵の人間にはちょうどお似合いなんだ、と開きなおっているわけです。

> 進歩主義史観=客観主義。一つ一つの命題をとって
> みると——あるいはその命題の前提をとってみると——、手放して正しいもの、あるいは少なくとも反証不可能なものが多いのです。神山さんもよくご存
> じのように、これに対して反動的左翼の感傷的反論を対置しても勝ち目はあり
> ません。

勝ち目ないんですけど、左翼運動としては個々の課題に個々に答えをださねばいかんのですよね。賛成か反対かというように。

例会のほうでも議論しましたが、社会化と敵対性の拡大とはいってもワンセットになっているものでして、進歩的側面ゼロの反動政策というのは例外に近い。進歩的側面が従来の左翼の運動基盤の解体につながる人が多いわけですね。

個々の課題でたたかうことは、労働者階級の団結を輪をひろげることに意義があるのであって、個々の課題で勝利することは二次的な重要性しかもたない、という答えかたもあると思います。

しかし、団結の輪をひろげるためにも個々の課題でたたかわなければなりません。また、個々の課題で無限後退しながら「合理化や自由化はいずれ生産の社会化を進展させ、階級対立を激化させるであろう」と言うだけでは、闘争回避の言い訳のようになりかねません。

金融危機への対処の仕方を例にとると、一方で銀行の公共性を重視し「金を出すかわりに口も出す」、公金投入を認めるかわりに議会在銀行経営に口を出す、という政策があります。

他方で、資本主義のもとでの社会性の承認はしょせん限界がある、公金注入は結局のところ資本の救済にしかならない、ビター一文も入れずに大銀行が破産して恐慌になっても労働者階級は恐れない、むしろ歓迎する、という路線もあるわけですね（ビター一文入れなくても資本主義は大丈夫だという立場もありましたが、ここでは無視します）。

たしかに反動左翼はジリ貧にならざるをえませんが、民主党の“市民的公共性”と新左翼の階級闘争路線のどちらかを取れと言われれば、ぼくは新左翼に味方してしまいます。かりに日本に西欧型社民勢力ができたとして、共同決定法など提起したとしても、やはり新左翼の肩をもつかもありません。

これでいいとは思ってませんが、現実の選択肢から選ぶとなると、こうなってしまうんです。

とりとめがなくすみません。

[ism-study.26] Re:

投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/04 20:42:37
修正日時： —

元発言

表題： [ism-study.20] Re^4: On the "Person" etc .(1)

投稿者： 今井 祐之

投稿日時： 1999/08/03 12:21:04

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.28] A Confirmation About Person	今井 祐之	1999/08/04 23:26:48

今井さん、皆さん、こんにちは。神山です。

今井さんの投稿のおかげで、ずいぶん論理構造が鮮明かつ具体的になってきました。

>>今井さんは、生産過程から出てきた商品所持者、商品の「番人」が、商品
>>品の人格化で、法的契機を含まずに、相互承認を含まずに、人格で、それ
>>が先にあつて...、というふうに把握されていらっしゃる、と理解してよい
>>でしょうか。

>

> 正におっしゃる通りです。

>

>>法に先行する経済的人格化のような関係をお考えですか。そ

>>の場合、「人格」とは何ゆえ、「人格」であるということになるのでしょ

>>うか。

>

> 物象の人格化であるが故。——ということではご満足頂けないでしょうね。

> 要するに、一方では社会を形成する一般的な実践的主体（相互の承認において

> 他の人格を承認することができる個人）であり、他方では自分で責任を負うこ

> とができる個別的な自覚的個性（意志と意識とを持ち自ら責任を負って自立

> 的・独立的に行為することができる個人）であるからです。そのようなものと

> して承認されているといまいとも……。商品所持者は、相互的に承認される

> 前から、交換過程ではそのように振る舞っているのではないのでしょうか？

「実践的主体」「個別的な自覚的個性」は、私が「自由な自己意識」・労働の媒介性と呼んだものに近い気がします。

ただし、人間労働の合目的な媒介的な自己性、人間労働の主体性、自由な自己性、を媒介する社会関係（人格関係）が生産においては存在せず、孤立化された当事者の交換行為によって産出されると考えます。

今井さんは、生産の外に、交換相手を探す過程、交換・承認しあう過程を区別し、前者の自己疎外的な振舞いに人格化をとらえるわけですね。

物象の人格化の用語を、物象の担い手というように、あるいは、物象の主体化、人間への内化というように、一般的に用いることには私は反対しません。

あるいは、人格概念を、承認関係・媒介関係だけでなく、それに先立つ自己意識性・主体性におくこと、物象的關係という社会関係において捉えること、も反対ではないのですが。

今井さんも、人格化に次のような区別をとらえてますし。

>[*1]但し、ここでの人間というのは、あくまでも商品の

> 人格化としての商品所持者の素材的な側面（五感を持つ

> ており、商品を手籠めにすることができるような側面）

> であると、俺は考えます（人格の素材的・人間的側

> 面）。これに対して、交換過程における商品所持者のオ

> ープンな振る舞いが考察される時には——特に、相互的

> 承認が規定された以降に商品所持者が取り扱われる時に

> は——、主に商品所持者の社会的な側面が問題になって

> いるわけです（人格の社会的・人格的側面）。

今井さんとの用語のずれは、次の問題意識の差からきている

> その場合にポイントになるのは、何故に商品所持者たちは人格として相互的に承認することができるのか、人格であるからなのか、そうではないのか、と

> ということなのです。(神山さんは俺が問題にしていることなど重々ご承知のこと
> と思います。ですが、繰り返しになりますが、こういう問題に余り詳しくな
> い方もいらっしゃるかもしれませんが何度でも確認いたします。お許しくだ
> さい>>神山さん)。

人格だから、相互承認できる、というのが今井さんで、商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格、ゆえに、というのが私ですが、そもそも労働、人間の本質性を、人格性とよぶならば、今井説と私はあまり変わりません。ただ私も「特別な主体概念」批判に拘り、留保して考察中なわけです。

こんなご返答でいいのか自信がありませんが、取急ぎの投稿です。

[ism-study.27] Re:

投稿者： 神山 義治
 投稿日時： 1999/08/04 21:12:24
 修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.20] Re^4: On the "Person" etc .(1)
 投稿者： 今井 祐之
 投稿日時： 1999/08/03 12:21:04

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.29] An Answer To 3 Questions	今井 祐之	1999/08/05 09:48:56

補足です。

> これから市場に行く商品番人・所持者(besitzer)は、物(Ding)を支配する人間(Mensch)である、これらの「物を商品として互いに関連させるため

>には」、物を自己の意思のもとに置く「人格(Person)として互いに相対
>しなければならない」と。で、「意思行為」「私的所有者としての相互承認」「法的関係」が、商品の媒介としてでできます。

という私の発言に今井さんがつぎのようにコメントしてくださっています。

>神山さんの「物を自己の意思のもとに置く「人格(Person) [.....]」はどこで成立しているのでしょうか？ 少なくとも「物を自己の意思のもとに置く」のは相互的承認に先行していますよね？

今井さんとの違いを強調してのべてみます。

私は、自己の意思のもとにおくこと自体は、人間労働の内面的契機としての占有、自己のものとしてかかわっている人間の関係行為、だと思いません。物を自己の意思のもとに置く人間のこの振舞いは、所有(承認された占有)の、人格(承認された人間)の契機でしょう。

所有も人格も、他に折り返しての、反省規定にある、対他的な意思関係規定にある、とかがえています。「として相互に相対」というわけです。こういう反省規定の空間が共同体であり、商品生産では、交換の相互承認に特化している。

これに対して；

物を支配する人間が物象に突き動かされ物象の五感となっている疎外・顛倒。ここに今井さんは、物象の人格化と人格としての能動性の成立を見るといってよろしいでしょうか。物象的關係に反省し、生きた人間の行為が物象の行為である局面に、物象の対である人格の成立または人格化を見る、といってよろしいでしょうか。物象という共同体に反省して、交換に先立ち、人格としての能動性が成立している、となるのでしょうか。

[ism-study.28] A Confirmation About Person

投稿者： 今井 祐之
 投稿日時： 1999/08/04 23:26:48
 修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.26] Re:
 投稿者： 神山 義治
 投稿日時： 1999/08/04 20:42:37

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.30] Re: A Confirmation About Person	神山 義治	1999/08/05 12:21:59

神山さん、ISM 研究会の皆さん、今井です。この投稿は神山さんに対する反論ではなく、お互いの対立点の確認です。俺と神山さんとは非常に微妙な点で争っているから、以下では、しつこいようですが、皆さんに対して対立点を明確にするために、俺流の言葉遣いで神山さんの見解を要約している部分があります。誤解があるようでしたら、訂正してください。

> 「実践的主体」「個別的な自覚的個性」は、私が「自由な自己意識」・
 > 労働の媒介性と呼んだものに近い気がします。

近いのだけでも、恐らく違うのでしょう。何故ならば、(a)もし商品所持者が交換過程では即自的に「一般的な実践的主体」、「個別的な自覚的個性」であり、且つ(b)もし神山さんの「自由な自己意識」が人格であるならば、そもそも商品所持者は交換過程では物象の人格化であるということになってしまいますから。なお、神山さんは、“[ism-study.5] Re: On "Kabunusi Soukai"(OKUMURA Hiroshi)” (1999/07/22 16:31) の中で、――

> [一般的に、] 人格とは、自由な自己意識ということ。

と述べていますから、恐らく神山さんにとっては、上記の仮定(a)が成立しないのでしょうか。

> 今井さんは、生産の外に、交換相手を探す過程、交換・承認しあう過程
 > を区別し、前者の自己疎外的な振舞いに人格化をとらえるわけですね。

俺の考えでは、「交換相手を探す過程、交換・承認しあう過程」の総てが交換過程の諸契機なのです。「交換・承認しあう過程」の中で神山さんが「交換」とおっしゃっているのは恐らく商品譲渡のことだと思います。もしそうならば、恐らく神山さんの場合にも（俺の場合にはもちろんそうですが）、「交換」で物象の人格化が形成されるわけではないですよ。で、「交換相手を探す過程」というのは例示でありまして、より正確には交換過程に「入り込んだ」(eingehen) 時点ということになります。まあ、“交換過程に入り込んだら普通の商品所持者は交換相手を探すだろう”ということで、こういう例示を挙げたわけです。こうして、(a)俺の場合には、「交換」(商品譲渡)にも相互的承認にも先行して、交換過程に入り込んだ時点で物象の人格化が形成されている；これに対して(b)神山さんの場合には、「交換」(商品譲渡)に先行する相互的承認の時点で物象の人格化が形成される。ということなのでしょう。

但し、あくまでも交換過程の諸契機の区別そのものも例示なのです。この例示を挙げたのは決定的な対立点を浮き彫りにするためにです。言うまでもありません、決定的な対立点というのは、神山さんがおっしゃるように、――

> 人格だから、相互承認できる、というのが今井さんで、商品の行動とし
 > て自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格、ゆ
 > えに、というのが私ですが、そもそも労働、人間の本質性を、人格性とよ
 > ぶならば、今井説と私はあまり変わりません。

これです(相互的承認の根拠問題)。但し、――これは強調しておきたいのですが――、商品の人格化である限りで「人格だから、相互承認できる」というのが俺の説です。しつこいようですが、確認しておきますと、神山さんの場合には、「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」を持っているだけでは、物象の人格化は成立していないわけですよ。相互的承認があって初めて人格だと。

ただ、ちょっと解らない点もありますので、確認していただければ幸いです(これは批判ではありません。あくまでも確認です)。(1)商品所持者は「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的

性格」をもつ人間の主体ですよ？ (2)もしそうならば——これは(1)の解答が yes である場合にのみ生じる質問です——、「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」は人格的な振る舞いだと思うのですが、商品所持者は、交換過程に eingehen した瞬間には、まだ「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」を持っていないのですよね？ (3)神山さんの上の引用文の書き方からは「労働、人間の本質性を、人格性とよぶ」のは俺の方であると神山さんは規定していると思うのですが、結局のところ、神山さんは「労働、人間の本質性を、人格性とよ」ばないのですよね？ どうして、こういう質問をするのかと言うと、もし(2)あるいは(3)の質問に対する解答が no であるならば、商品所持者は、交換過程に eingehen した瞬間には、人格として振る舞ってはいるが、まだ商品の人格化ではない——ということになってしまうからです。

> 今井さんも、人格化に次のような区別をとらえていますし。

>

>> [*1]但し、ここでの人間というのは、あくまでも商品の
>> 人格化としての商品所持者の素材的な側面（五感を持つ
>> ており、商品を手籠めにすることができるような側面）
>> であると、俺は考えます（人格の素材的・人間的側
>> 面）。これに対して、交換過程における商品所持者のオ
>> ープンな振る舞いが考察される時には——特に、相互的
>> 承認が規定された以降に商品所持者が取り扱われる時に
>> は——、主に商品所持者の社会的な側面が問題になって
>> いるわけです（人格の社会的・人格的側面）。

但し、俺の場合には、神山さんとは異なって、「人格の社会的・人格的側面」は交換過程で即自的に現れるわけです。で、商品所持者は、(a)「人格の社会的・人格的側面」を交換過程で既に即自的に持っているからこそ、相互的承認することができるのであり、しかも(b)相互的承認においてこの側面を実証する——こういうことになるわけです。俺の考えでは、「人格の素材的・人間的側面」が重要になるのは、商品所持者のオープンな振る舞いにおいてではなく、寧ろ商品に対するクローズドな関係においてだということになるわけで

す。

これに対して、神山さんの場合には、——「今井さんも、人格化に次のような区別をとらえていますし」という発言を鑑みると、恐らく神山さんも上記の二側面を認めているのだと思いますが、但し、——「人格の社会的・人格的側面」は相互的承認において初めて形成されるのだと思います。

[ism-study.29] An Answer To 3 Questions

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/05 9:48:56
修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.27] Re:
投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/04 21:12:24

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.31] Re: An Answer To 3 Questions	神山 義治	1999/08/05 12:22:01

神山さん、ISM 研究会の皆さん、今井です。神山さん、論点を整理してください、ありがとうございます。取り敢えず、神山さんからの質問にお答えいたします。

1.第一の質問に対する回答

まずは第一の質問から。

>物を支配する人間が物象に突き動かされ物象の五感となっている疎外・
>顛倒。ここに今井さんは、物象の人格化と人格としての能動性の成立を見
>るといってよろしいでしょうか。

えーと、もう一度『経済学批判』の移行規定を引用しておきます。――

「それ〔＝交換過程〕は互いに独立的な諸個人が入り込む社会的過程であるが、しかし彼らがこの過程に入り込むのはただ商品所持者としてのみである。互いに対する彼らの相互的定在は彼らの諸商品の定在であり、こうして彼らが現れるのは、事実上、ただ交換過程の意識的な担い手としてのみである」(Kritik, S.120) [*1]。

――つまり、「独立的な諸個人」が交換過程に「入り込む」(eingehen)瞬間、すなわち彼らが「交換過程の意識的な担い手として」交換過程に「現れる」(erscheinen)瞬間に、俺は物象の人格化の成立を見えています。

[*1]なお、原文については、俺は“[ism-study.20] Re^4: On the "Person" etc .(1)”(1999/08/03日 12:21)でこれを引用しておきましたので、そちらの方をご覧ください。

2.第二の質問に対する回答

次に、第二の質問に移ります。

>物象的關係に反省し、生きた人間の行為

>が物象の行為である局面に、物象の対である人格の成立または人格化を見
>る、とってよろしいでしょうか。

(1)「物象的關係に反省」する「局面」について。うーむ、難しいですね。何が「物象的關係に反省」するのでしょうか。申し訳ありません、俺にはちょっと難しいのでご勘弁を。――と言ってもお許し頂けないでしょうから、俺の頭で解る限りでお答えいたします。

第一に、主語に人格的關係を選択します。人格化が発生するのは、“人格的關係が物象的關係に反省する”というのも、ちょっと、人格化を措定する発生

的な関連の表現方法としては違うのではないかと思います。

第二に、今度は主語に物象的關係を選択します。この場合には、“物象的關係が物象的關係に反省する――自己内反省する (in sich reflektieren) ——”局面だということになります。一般的に、そう言ってもいいと思うのですが、そうすると、人格化の発生と物象化の進展とが同じもんなっちゃういます[*1]。

[*1]俺は物象化が成立する局面と人格化が成立する局面とは異なると考えています。俺と同様に神山さんも物象の人格化論が商品の交換過程で成立するとお考えなので、神山さんにとっても物象化が成立する局面と人格化が成立する局面とは異なるのですよね？恐らくこの点ではわれわれの間に対立点はないでしょう。

で、物象化が進展する局面と人格化が進展する局面とも必ずしも同じではないと考えるわけです。恐らく、この点でも俺と神山さんとの間には対立点はないのではないかと思います。

但し、資本の人格化を視野に入れると、かなり厄介なことになるのです。直接的生産過程の内部での物象化・人格化の進展が問題になりますから。マルクスはこの点を解決していないと俺は考えています。ただ、現在この問題を持ち出しても議論が混乱するだけでしょうから、止めておきましょう。

何よりもまず、物象的關係が自己内反省する局面は物象的關係そのものの自立化の――それ故に物象化の――局面でしょう。例えば、価値表現の回り道における自己関連であり、例えば貨幣資本循環における資本の自己関連であり、例えば利潤率における自己関連[*1]でしょう。いずれも、物象の自立化を、従ってまた物象化の進展を表す局面です。

[*1]正確には、利潤率によって成立した資本の自己内関係における自己内反省です。――「従って、この超過分

は、利潤率から——ヘーゲ尔的に言う——自己内に還帰する限りでは、あるいは換言すると、利潤率によってより詳しく特徴づけられる限りでは、資本が一年間あるいは或る一定の流通期間に自己自身の価値を越えて産み出す超過分として現れる〔Der Ueberschuß also, wie er, hegelsch gesprochen, sich aus der Profitrate in sich zurückreflectirt, oder anders --- der Ueberschuß, näher durch die Profitrate charakterisirt, erscheint also als ein Ueberschuß über seinen eignen Werth, den das Capital jährlich abwirft, oder in einer bestimmten Circulationsperiode erzeugt〕(Hm, S.64)。

だから、俺の規定によると、なるほど物象の人格化は物象的關係が「物象的關係に〔自己内〕反省」する「局面」で発生するのだが、しかしそれだけでは十分ではないということになるのでしょう。神山さんの用語法を用いて俺の考えを言うと、“物象の人格化は物象的關係が人格という形態で自己内反省する”局面で発生するということになるでしょう。

さて、恐らく神山さんが念頭においておられるのは恐らく次の文集団であるはずで。

「しかし、対自的に存在する資本とは資本家のことである。資本は必要だが資本家は必要ではないと、社会主義者たちはよく口にする。その場合には、資本は純然たる物象として現れており、生産關係として現れてはいない。生産關係が自己内に反省しているのが正に資本家なのである。なるほど私は資本をこの個別的な資本家から切り離し得るし、また資本は別の資本家のもとに移っていき得る。しかし、資本を失うと、この個別的な資本家は、資本家であるという属性を失ってしまう。それ故に、資本は、なるほど個別的な資本家から分離され得るが、資本家というもの——そのようなものとして資本家は労働者というものに対峙する——からは分離され得ないのである。それと同様に、個別的な労働者も労働の対自的存在であるということをしめ得る。労働者が貨幣を相続

するということも盗むということなどもあり得る。しかし、その場合には、労働者は労働者であるということをしめてしまう。労働者は労働者としては対自的に存在する労働でしかないのである〔Aber das für sich seinende Capital ist der Capitalist. Es wird wohl von Socialisten gesagt, wir brauchen Capital aber nicht den Capitalisten. Dann erscheint das Capital als reine Sache, nicht als Productionsverhältniß, das in sich reflectirt eben der Capitalist ist. Ich kann das Capital wohl von diesem einzelnen Capitalisten scheiden und es kann auf einen andern übergehn. Aber indem er das Capital verliert, verliert er die Eigenschaft Capitalist zu sein. Das Capital ist daher wohl vom einzelnen Capitalisten trennbar, nicht von dem Capitalisten, der als solcher dem Arbeiter gegenübersteht. So kann auch der einzelne Arbeiter aufhören das Fürsichsein der Arbeit zu sein; er kann Geld erben, stehlen etc. Aber dann hört er auf Arbeiter zu sein. Als Arbeiter ist er nur die für sich seiende Arbeit〕(Gr, Teil 1, S.223)。

——つまり、(a)資本という物象は自己内反省して資本家という人格的形態を必然的に受け取る；(b)しかも、正に資本は物象的生産關係であるから、資本家は、個別的な人格であるとは言っても、個別的な人格として資本家であるのではなく、「資本家というもの」(諸人格の關係)として資本家なのである；(c)だから、資本家はいらねーが資本は欲しいってのはバカの幻想だ——ということでしょう。

で、上記引用文では、専ら物象の能動性(主語としての物象、主体としての物象)に即して、“物象的關係が自己内反省する局面で物象の人格化が発生する”という規定を行っているのです。実際にまた、ブルジョア社会での現実的な主体は物象なのでから、これは当然の取り扱い方でしょう。

ただ、既に述べたように、俺は物象化が発生する局面と人格化が発生する局面との区別を入れておかなければならないと思うのです。物象と人格との対立に即して規定を行う場合には、“物象的關係が人格的關係に反省する局面で物象の人格化が発生する”と表現してもいいのではないかと思います。(もちろん、言うまでもなく、この場合には、“物象的關係が人格的關係に反省す

る”という規定は物象の能動性に即しては直接的に、直ちに、そっくりそのまんま“物象的關係が自己内に反省する”という規定であるわけです)。

そうだとすると、物象と人格との対立を念頭に置くと、寧ろ、“物象的關係が人格的關係に反省する局面で、物象の人格化は発生する”というのが、人格化の発生を表現するのに最も解りやすいかなあとと思います。こうすれば、「反省」という神山さん（およびマルクス）の用語法を用いながら、俺流のやり方で、物象化が発生する局面と人格化が発生する局面とを区別することができるのではないかと考えた次第です。但し、正確を期するならば、既に述べたように、“物象的關係が人格という形態で自己内反省する局面で、物象の人格化は発生する”と言うべきであるのかもしれませんが。

と、まあ、こんなところでしょうか。なにも論証になっていない感覚的な言い回しに終始して申し訳ありません。こちら辺、俺はよく解っていないので、ご教示いただければ幸いです。

(2)「生きた人間の行為が物象の行為である局面」について。俺の用語法では、“ブルジョア社会の現実的主体である物象の運動が人格の運動によって担われなければならない局面、従って物象が既存の人格を自己の媒介的実現形態にする局面”という風になります。「物象の行為」というのが今一つよく解りませんが、「生きた人間の行為が物象の行為である」と言っちゃうと、「生きた人間の行為が物象の」運動として実現される局面（物象化の局面）を連想してしまい、なんか価値形態論の局面と交換過程論の局面とが、従ってまた物象化の局面と人格化の局面とがうまく区別できないように思われます。

(3)「物象の対である人格の成立または人格化を見る」について。俺の考えでは、上記の局面に物象の「人格化を見る」——そしてこのような疎外された形態で人格の実現を見る——ということですか。神山さんの質問文から「物象の対である人格の成立または」という部分が消去されているということ、神山さんの質問文に「そしてこのような疎外された形態で人格の実現を見る」という部分が追加されているということにご注意を。ここでは、神山さんがおっしゃる「成立」とは発生のことであると解釈しました。俺の考えでは、人格の発生は物象の発生に先行するのです。もしそうでなければ、どうして人格の物象化としての物象があり得るでしょうか。商品は人格的生産關係の物象化であり、商品という形で物象化するべき諸人格の關係は仮象では決してありません。——これが俺の廣松さんに対する批判点なのです。

申し訳ありません。いずれも神山さんの問題意識からすると、些細なことなのでしょう。ですが、俺の問題意識からすると、疎かにしてはいけないことですから、敢えて細かく補足しておきました。

3.第三の質問に対する回答

最後に第三の質問です。

>物象という共同体に反省して、交換に
>先立ち、人格としての能動性が成立している、となるのでしょうか。

“[ism-study.28] A Confirmation About Person” (1999/08/04 23:26)でも書きましたが、ちょっと神山さんの「交換」というタームの使い方について確認させてください。

俺は“[ism-study.15] Re^2: On the "Person" etc.” (1999年8月2日 11:57)では次のように述べています。——

>これは商品の人格化とは異なって、交換
>過程で形成されるものではありませんよね？

>商談に先行して、生産過程からでてきた瞬間に、商品所持者が商品の人格
>化としての人格になっているのです。

>交換過程に登場する商品所持者たちが、(1)商品の人格化である

同様にまた、俺は“[ism-study.20] Re^4: On the "Person" etc .(1)” (1999/08/03 12:21)では次のように述べています。——

>俺の考えでは、商品所持者は交換過程に出て
>きた時に既に人格です。

>商品所持者は、相互的に承認される

>前から、交換過程ではそのように振る舞っているのではないのでしょうか？

>商品所持者は物とのクローズドな関係においては人間でしかありませんが、
>オープンな交換過程ではどのように振る舞うのでしょうか？

> (交換過程でのオープンな場面で

>の) 商品所持者=ペルソナ=社会的諸関係のアンサンブル=物象の人格化

>商品所持者・貨幣

>所持者は交換過程 (=オープンな社会) に出てきた瞬間に既に物象の人格化
>のです。

更に、神山さんご自身，“[ism-study.17] Re^3: On the "Person" etc.”
(1999/08/02 18:53) では次のように述べています。――

>今井さんは、生産過程から出てきた商品所持者、商品の「番人」が、商
>品の人格化で、法的契機を含まずに、相互承認を含まずに、人格で、それ
>が先にあつて...、というふうに把握されていらつしやる、と理解してよい
>でしょうか。

以上の点から、神山さんが用いている「交換」は過程としての交換、交換過程ではないということが明瞭です。そうすると、やはり、俺が
“[ism-study.28] A Confirmation About Person” (1999/08/04 23:26) で解
釈しているように、――

>「交換・承認しあう過程」の中で神山さんが「交
>換」とおっしゃっているのは恐らく商品譲渡のことだと思います。

ということになるのでしょうか。これで宜しいのでしょうか？

もしそうならば、俺の考えでは、yes, 「交換に先立ち、人格としての能動
性が成立している」ということになります。物象の人格化の成立は神山さんの

「交換」に先行するだけではなく、相互的承認にも先行します。

但し、もしその解釈に立つならば、神山さんの場合にも、「交換に先立ち、
人格としての能動性が成立している」はずなのですね。神山さんの場合には、
商品譲渡に先行する相互的承認時点[*1]で物象の人格化が成立しているはずで
すから、「交換に先立ち、人格としての能動性が成立している」という点では
俺と神山さんとの間で変わりはないと思います。対立点はその先にあり、(a)
交換（商品譲渡）に先行して相互的承認の時点で人格化が発生するのか、それ
とも(b)交換（商品譲渡）に先行して交換過程に *eingehen* する時点で人格化が
発生するのか――という点にあるのだと思います。

[*1]相互的承認時点というのは要するに商談時のことで
す。“[ism-study.15] Re^2: On the "Person" etc.”

(1999/08/02 11:57) 及び“[ism-study.20] Re^4: On
the "Person" etc .(1)” (1999/08/03 12:21) をご覧

ください。マルクスのテキストに即しては、次の引用を
ご覧ください。――「発展した交換取引では交換者たち
は暗黙のうちに、平等な人格として、且つ彼らのそれぞ
れによって交換されるべき財の平等な所有者として相互
的に承認し合っているということを、私は商品流通の分
析の際に述べた。彼らは互いに自己の財を提供し合い、
取引について互いに合議に達する間に、既にこれを行
う」(Zu A. W., S.377)。神山さんもよくご承知のよ
うに、相互的承認がない商品譲渡は商品譲渡ではなく、
ただのドロボーです。

参考文献

Gr, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie,

Ökonomisches Manuskripte 1857/58, In: MEGA^2 II/1.1--1.2.

Hm, Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863--1865) Drittes

Buch, In: MEGA^2 II/4.2

Kritik, Zur Kritik der politischen Ökonomie. Erstes Heft,

Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858--1861, In: MEGA²
II/2.

Zu A. W., Randglossen zu Adolph Wagners „Lehrbuch der politischen
Ökonomie“, In: MEW, Bd. 19.

[ism-study.30] Re: A Confirmation About Person

投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/05 12:21:59
修正日時： —

元発言

表題： [ism-study.28] A Confirmation About Person

投稿者： 今井 祐之

投稿日時： 1999/08/04 23:26:48

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.33] Re^2: A Confirmation About Person	今井 祐之	1999/08/05 17:53:38

今井さん、皆さん今日は。神山です。

>> 「実践的主体」「個別的な自覚的個性」は、私が「自由な自己意識」・

>> 労働の媒介性と呼んだものに近い気がします。

>

> 近いのだけれども、恐らく違うのでしょう。何故ならば、(a)もし商品所持

> 者が交換過程では即自的に「一般的な実践的主体」、「個別的な自覚的個

> 性」であり、且つ(b)もし神山さんの「自由な自己意識」が人格であるなら

> ば、そもそも商品所持者は交換過程では物象の人格化であるということになっ

> てしまいますから。なお、神山さんは、“[ism-study.5] Re: On "Kabunusi

> Soukai"(OKUMURA Hiroshi)” (1999/07/22 16:31) の中で、 —

>

>> [一般的に、] 人格とは、自由な自己意識ということ。

>

> と述べていますから、恐らく神山さんにとっては、上記の仮定(a)が成立しな

> いのでしょうね。

すみません。ちょっとよくわからないのですが。とりあえず、交換が、
自由な個人という形式を、抽象的に成立させる点だけ強調しておきたいで
す。

> 俺の考えでは、「交換相手を探す過程、交換・承認しあう過程」の総てが交
> 換過程の諸契機なのです。

私も、「ワン・セット」と述べたのは、同じ考えからです。

> で、「交換相手を探

> す過程」というのは例示でありまして、より正確には交換過程に「入り込ん

> だ」(eingehen) 時点ということになります。まあ、“交換過程に入り込んだ

> ら普通の商品所持者は交換相手を探すだろう”ということで、こういう例示を

> 挙げたわけです。こうして、(a)俺の場合には、「交換」(商品譲渡)にも相

> 互的承認にも先行して、交換過程に入り込んだ時点で物象の人格化が形成され

> ている；これに対して(b)神山さんの場合には、「交換」(商品譲渡)に先行

> する相互的承認の時点で物象の人格化が形成される。こういうことなのでしょ

> う。

> ただ、ちょっと解らない点もありますので、確認していただければ幸いです

> (これは批判ではありません。あくまでも確認です)。(1)商品所持者は「商

> 品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的

> 性格」をもつ人間の主体ですよね？(2)もしそうならば——これは(1)の解答

> がyesである場合にのみ生じる質問です——、「商品の行動として自己の行動

> をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」は人格的な振る舞い

> だと思うのですが、商品所持者は、交換過程に eingehen した瞬間には、まだ

> 「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意

> 識的性格」を持っていないのですよね？

もっている考えます。

> (3) 神山さんの上の引用文の書き方か

> らは「労働、人間の本質性を、人格性とよぶ」のは俺の方であると神山さんは
> 規定していると思うのですが、結局のところ、神山さんは「労働、人間の本質
> 性を、人格性とよ」ばないのですよね？

今井さんとの違いを強調すると、人格性は、社会性、意思関係の規定であって、労働する個人の媒介形態、規定性、対他的な契機ということになります。労働が産出するもの、人格は産出されるもの、ということになります。

もちろん、人間労働の人格的な本質、人間の社会性、の対象化が具体的な人格形態である。生きた人間（個）と人格性（社会的個）との統一が人間存在である、と私も考えていますから、今井さんと同じともいえます。

ただ、労働の疎外された在り方では、生産において直接には、意思関係・人格関係は無い、というわけです。

> 但し、俺の場合には、神山さんとは異なって、「人格の社会的・人格的側面」は交換過程で即自的に現れるわけです。で、商品所持者は、(a)「人格の社会的・人格的側面」を交換過程で既に即自的に持っているからこそ、相互的承認することができるのであり、しかも(b)相互的承認においてこの側面を実証する——こういうことになるわけです。俺の考えでは、「人格の素材的・人間的側面」が重要になるのは、商品所持者のオープンな振る舞いにおいてではなく、寧ろ商品に対するクローズドな関係においてだということになるわけです。

> これに対して、神山さんの場合には、——「今井さんも、人格化に次のような区別をとらえていますし」という発言を鑑みると、恐らく神山さんも上記の二側面を認めているのだと思いますが、但し、——「人格の社会的・人格的側面」は相互的承認において初めて形成されるのだと思います。

だいたいこういうことでしょうかね。

[ism-study.31] Re: An Answer To 3 Questions

投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/05 12:22:01
修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.29] An Answer To 3 Questions
投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/05 09:48:56

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.36] Re^2: An Answer To 3 Questions	今井 祐之	1999/08/06 09:52:51

今井さん、ごていねいなお答えありがとうございます。

> ——つまり、「独立的な諸個人」が交換過程に「入り込む」(eingehen) 瞬間
> 間、すなわち彼らが「交換過程の意識的な担い手として」交換過程に「現れる」(erscheinen) 瞬間に、俺は物象の人格化の成立を見えています。

了解いたしました。

>
> [*1]俺は物象化が成立する局面と人格化が成立する局面とは異なると考えています。俺と同様に神山さんも物象化の人格化論が商品の交換過程で成立するとお考えなので、すから、神山さんにとっても物象化が成立する局面と人格化が成立する局面とは異なるのですよね？ 恐らくこの点ではわれわれの間に対立点はないでしょう。で、物象化が進展する局面と人格化が進展する局面とも必ずしも同じではないと考えるわけです。恐らく、この点でも俺と神山さんとの間には対立点はないのではないかと思います。

そのとおりだと思います。

- > 但し、資本の人格化を視野に入れると、かなり厄介な
- > ことになるのです。直接的生産過程の内部での物象化・
- > 人格化の進展が問題になりますから。マルクスはこの点
- > を解決していないと俺は考えています。ただ、現在のこの
- > 問題を持ち出しても議論が混乱するだけでしょうから、
- > 止めておきましょう。

商品論から、固有の資本論、株式会社論にいくと、問題が拡散してしまうでしょう。

- >
- > さて、恐らく神山さんが念頭においておられるのは恐らく次の文集団である
- > はずです。——
- >
- > 「しかし、対自的に存在する資本とは資本家のことである。資本は必要だが資本家は必要ではないと、社会主義者たちはよく口にする。その場合には、資本は純然たる物象として現れており、生産関係として現れてはいない。生産関係が自己内に反省しているのが正に資本家なのである。なるほど私は資本をこの個別的な資本家から切り離し得るし、また資本は別の資本家のもとに移っていき得る。しかし、資本を失うと、この個別的な資本家は、資本家であるという属性を失ってしまう。それ故に、資本は、なるほど個別的な資本家から分離され得るが、資本家というもの——そのようなものとして資本家は労働者というものに対峙する——からは分離され得ないのである。それと同様に、個別的な労働者も労働の対自的存在であるということも止め得る。労働者が貨幣を相続するというのも盗むということなどもあり得る。しかし、その場合には、労働者は労働者であるということも止め得る。労働者は労働者としては対自的に存在する労働でしかないのである〔Aber das für sich seiende Capital ist der Capitalist. Es wird wohl von Socialisten gesagt, wir

- > brauchen Capital aber nicht den Capitalisten. Dann erscheint das
- > Capital als reine Sache, nicht als Produktionsverhältniß, das
- > in sich reflectirt eben der Capitalist ist. Ich kann das Capital wohl
- > von diesem einzelnen Capitalisten scheiden und es kann auf einen
- > andern übergehn. Aber indem er das Capital verliert, verliert er
- > die Eigenschaft Capitalist zu sein. Das Capital ist daher wohl vom
- > einzelnen Capitalisten trennbar, nicht von dem Capitalisten, der als
- > solcher dem Arbeiter gegenübersteht. So kann auch der einzelne
- > Arbeiter aufhören das Fürsichsein der Arbeit zu sein; er kann
- > Geld erben, stehlen etc. Aber dann hört er auf Arbeiter zu sein.
- > Als Arbeiter ist er nur die für sich seiende Arbeit]」(Gr,
- > Teil 1, S.223)。

- >
- > ——つまり、(a)資本という物象は自己内反省して資本家という人格的形態を
- > 必然的に受け取る；(b)しかも、正に資本は物象的生产関係であるから、資本
- > 家は、個別的な人格であるとは言っても、個別的な人格として資本家であるの
- > ではなく、「資本家というもの」(諸人格の関係)として資本家なのである；
- > (c)だから、資本家はいらねーが資本は欲しいってのはバカの幻想だ——とい
- > うことでしょう。
- > で、上記引用文では、専ら物象の能動性(主語としての物象、主体としての
- > 物象)に即して、“物象的關係が自己内反省する局面で物象の人格化が発生す
- > る”という規定を行っているのです。実際にまた、ブルジョア社会での現実的
- > な主体は物象なので、これは当然の取り扱い方でしょう。
- > ただ、既に述べたように、俺は物象化が発生する局面と人格化が発生する局
- > 面との区別を入れておかなければならないと思うのですね。物象と人格との対
- > 立に即して規定を行う場合には、“物象的關係が人格的關係に反省する局面で
- > 物象の人格化が発生する”と表現してもいいのではないかと思います。(もち
- > ろん、言うまでもなく、この場合には、“物象的關係が人格的關係に反省す
- > る”という規定は物象の能動性に即しては直接的に、直ちに、そっくりそのま
- > んま“物象的關係が自己内に反省する”という規定であるわけです)。
- > そうだとすると、物象と人格との対立を念頭に置くと、寧ろ、“物象的關係
- > が人格的關係に反省する局面で、物象の人格化は発生する”というのが、人格

> 化の発生を表現するのに最も解りやすいかなと思います。こうすれば、「反
 > 省」という神山さん（およびマルクス）の用語法を用いながら、俺流のやり方
 > で、物象化が発生する局面と人格化が発生する局面とを区別することができる
 > のではないかと考えた次第です。但し、正確を期するならば、既に述べたよう
 > に、“物象的關係が人格という形態で自己内反省する局面で、物象の人格化は
 > 発生する”と言うべきであるのかもしれませんが。
 > と、まあ、こんなところでしょうか。なにも論証になっていない感覚的な言
 > い回しに終始して申し訳ありません。こちら辺、俺はよく解っていないので、
 > ご教示いただければ幸いです。

以上の引用は、私の言いたかったことを、緻密に書き広げてくださった
 感じです。「人格的關係」に拘りのちがいがありますが。

> (2)「生きた人間の行為が物象の行為である局面」について。俺の用語法で
 > は、“ブルジョア社会の現実的主体である物象の運動が人格の運動によって担
 > われなければならない局面、従って物象が既存の人格を自己の媒介的実現形態
 > にする局面”という風になります。「物象の行為」というのが今一つよく解り
 > ませんが、「生きた人間の行為が物象の行為である」と言っちゃうと、「生き
 > た人間の行為が物象の」運動として実現される局面（物象化の局面）を連想し
 > てしまい、なんか価値形態論の局面と交換過程論の局面とが、従ってまた物象
 > 化の局面と人格化の局面とがうまく区別できないように思われます。

価値形態論の局面と交換過程論の局面との区別は、商品の能動性の媒介
 としての価値形態の産出と、人間の欲望満足行動を介した商品相互の実現
 と考えますが（これはまた別の機会の論題で）、とりあえず、区別がある
 ことが分ればいいのではないのでしょうか。

> (3)「物象の対である人格の成立または人格化を見る」について。俺の考え
 > では、上記の局面に物象の「人格化を見る」——そしてこのような疎外された
 > 形態で人格の実現を見る——ということです。神山さんの質問文から「物象の
 > 対である人格の成立または」という部分が消去されているということ、神山さ
 > んの質問文に「そしてこのような疎外された形態で人格の実現を見る」という

> 部分が追加されているということにご注意を。ここでは、神山さんがおっしゃ
 > る「成立」とは発生のことであると解釈しました。俺の考えでは、人格の発生
 > は物象の発生に先行するのです。もしそうでなければ、どうして人格の物象化
 > としての物象があり得るでしょうか。商品は人格的生産關係の物象化であり、
 > 商品という形で物象化すべき諸人格の關係は仮象では決してありません。
 > ——これが俺の廣松さんに対する批判点なのです。

「商品は人格的生産關係の物象化であり」と私も考えていますが、それ
 は、社会的生産關係が、人格的に媒介されない、物象的に媒介される、と
 いう意味で受取っています。

「俺の考えでは、人格の発生は物象の発生に先行するのです。もしそう
 でなければ、どうして人格の物象化としての物象があり得るでしょうか」
 とおっしゃる拘りが、わかるようで、今一つすとんとおちないのですが。

たしかに物象化とは、人格の物象化なのですが、それは、より大きくい
 えば、生産關係の物象化ですね。生産は、人格的に媒介されなければならない
 （人格的生産關係、人格的に媒介されるべき關係）が、人格的關係は
 形成されていない、という矛盾です。もちろん、この「ねばならない」は
 、今井さんもよくご承知のとおり、「特別な主体概念」の「人格」が潜伏
 していて背後から操って現れ出ようとしているわけではありません（潜伏
 こそは広松的な理解ですよ）。

この矛盾を解く独特の構造（媒介形態）を、私は大雑把に単純化してと
 らえて、まあ逃げてるわけです。つまり、生産は、人格的に媒介されなけ
 ればならないが、人格的關係は形成されておらず、生産の関連をつけよう
 とするのは物象である、生産は人格的でない、しかし、人格的でなければ
 ならず、この人格性は、生産ならぬ生産から疎外された生産の顔である「
 交換」において成立する、と。

交換過程での人格の発生は、今井さんも私も同じくとらえるところす
 。

ただ、今井さんは、物象の担い手を人格化とするわけです。物象は運動
 しなければなりませんから。これが人格化でなかったら、何なの？とな
 るのですよね。

私はまずは、物神性の構造ととらえます。第1章第4節を、交換過程論

にもちこむのか、といわれそうですが、人間一物の意識構造、私的所有として区切られる空間の内面構造を、当然維持したまま、交換に入るわけです。ただし、ここでは、人間は、いわば静止した、物象の顔から、交換運動しようとする物象の担い手なわけです。相互承認してしまえば、これも法的人格の契機になってしまい、法的行為に一連の契機になってしまいますが。とりあえず、担い手一般を人格化とする用語はマルクスも使っていますし、可能ですが、ここで、担い手を人格化とすると、ちょっと、意味が拡散するのではないか（第1章第4節の人間はもちろん人格化とはよばないのですよね）、という気がします。このように、私的生産の自己矛盾からとらえていくことは、今井さんも同じだと思います。あくまでも、疎外であり、矛盾、あるけどない、ですよ。だから、人格＝「仮象」説に対して、物象化を措定する、物象化に先立つ人格がある、先に人格がなければいけない、と強調することは、かえって、広松説に引きずられはしないか、今井さんの問題意識に即しても、疑問の余地が生じるようにおもわれます。次の引用についてもまた考えさせてください。

>対立点はその先にあり、(a)
 > 交換（商品譲渡）に先行して相互的承認の時点で人格化が発生するのか、それ
 > と(b)交換（商品譲渡）に先行して交換過程に eingehen する時点で人格化が
 > 発生するのか——という点にあるのだと思います。
 >
 > [*1]相互的承認時点というのは要するに商談時のことで
 > す。“[ism-study.15] Re^2: On the "Person" etc.”
 > （1999/08/02 11:57）及び“[ism-study.20] Re^4: On
 > the "Person" etc .(1)”（1999/08/03 12:21）をご覧
 > ください。マルクスのテキストに即しては、次の引用を
 > ご覧ください。——「発展した交換取引では交換者たち
 > は暗黙のうちに、平等な人格として、且つ彼らのそれぞ
 > れによって交換されるべき財の平等な所有者として相互
 > 的に承認し合っているということを、私は商品流通の分
 > 析の際に述べた。彼らは互いに自己の財を提供し合い、
 > 取引について互いに合議に達する間に、既にこれを行

> う」（Zu A. W., S.377）。

> 神山さんもよくご承知のよ

> うに、相互的承認がない商品譲渡は商品譲渡ではなく、
 > ただのドロボーです。

！

[ism-study.32] Re: On "New Liberalism" etc.

投稿者： 神山 義治
 投稿日時： 1999/08/05 12:22:04
 修正日時： ————

元発言

表題： [ism-study.25] Re: On "New Liberalism" etc.
 投稿者： 窪西 保人
 投稿日時： 1999/08/04 12:33:15

コメント

コメントはありません。

窪西さん、皆さん、今日は。神山です。

> 新自由主義についてですが、これは自由主義といえるのだろうかと思ったりし
 > ます。新自由主義のばあい、自由は効率性達成のための手段にすぎず、目的では
 > ないように思うのですけど。

私が「政策としての」といったやつですね。もちろん、効率性が前面に出されても、古典派のような科学の暗さを持ったそれではありません。トータルなシステムの正当性は再構築できないので、まさに効率性がおしだされるわけです。

株式会社法制も、建前としては、株主の権利といいつつ、実質は、効率性のために、株主の権利を剥奪し尽くそうとする、進歩と反動の混合物ですね。

> また新自由主義は、経済成長主義という点でケインズ主義と同じだと言えるかとおもいます。といっても、資本蓄積しない資本主義など無いわけだから、資本主義は経済成長主義を捨てられないんですけど。古典派も経済成長主義です。

相互補完的だけど、資本の形態の局面の違い、かつてと今で、資本の成熟度の違いがあるわけです。そしてその展開のうちに資本の自己否定性も進展するとかんがえられます。

>
> 「自由・平等・所有」に続けてマルクスは「ベンサム」を並べてますが、ぼくはこの「ベンサム」が妙にひっかかります。前の3つは商品経済を自然権から基礎づけようとするものですけど、予定調和論はこうすれば世の中うまくいくという話ですよ。スミスとかヒュームとかの経済的自由主義は、基本的に予定調和論だとおもいます。

私も変だな、とと思ってました。

>
> 福祉国家論にしろ新自由主義にしろ、社会のタテマエについての意識が薄く、世の中うまくいってればいいじゃないかというノリがあるわけですね。複雑系経済学に至ると、個人の自由など幻想だと言って新古典派を攻撃する。でも市場というシステムでしか世の中うまくいかない(みたい)だから、これが浅知恵の人間にはちょうどお似合いなんだ、と開きなおっているわけです。

そうそう。新古典派を批判しつつ、同じ前提を持っていて、市場を上手く機能させるには、新古典派的な人間像から脱却せよ、ってことかな。

感想だけですみません。

[ism-study.33] Re^2: A Confirmation About Person

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/05 17:53:38
修正日時： —

元発言

表題： [ism-study.30] Re: A Confirmation About Person
投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/05 12:21:59

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.34] Re: Re^2: A Confirmation About Person	神山 義治	1999/08/05 23:29:30

神山さん、ISM 研究会の皆さん、今井です。神山さん、いつもいつも俺のくだらない議論にお付き合いただき、誠にありがとうございます。

>>> 「実践的主体」「個別的な自覚的個性」は、私が「自由な自己意識」・>>> 労働の媒介性と呼んだものに近い気がします。

>>

>> 近いのだけれども、恐らく違うのでしょう。何故ならば、(a)もし商品所持者が交換過程では即自的に「一般的な実践的主体」、「個別的な自覚的個性」であり、且つ(b)もし神山さんの「自由な自己意識」が人格であるならば、そもそも商品所持者は交換過程では物象の人格化であるということになってしまいますから。なお、神山さんは、「[ism-study.5] Re: On "Kabunusi Soukai"(OKUMURA Hiroshi)" (1999/07/22 16:31)」の中で、——

>>

>>> [一般的に、] 人格とは、自由な自己意識ということ。

>>

>> と述べていますから、恐らく神山さんにとっては、上記の仮定(a)が成立しな

>> いのでしょうね。

>

> すみません。ちょっとよくわからないのですが。

いえいえ、そんな深刻なお話ではないのです。お手数ですが、もう一度、
“[ism-study.20] Re^4: On the "Person" etc .(1)” (1999/08/03 12:21)
をご覧ください。そこでは、神山さんが“[ism-study.17] Re^3: On the
"Person" etc.” (1999/08/02 18:53) で提出した——

>法に先行する経済的人格化のような関係をお考えですか。そ
>の場合、「人格」とは何ゆえ、「人格」であるということになるのでしょ
>うか。

という問題に対して、俺は——

>一方では社会を形成する一般的な実践的主体（相互的承認において
>他の人格を承認することができる個人）であり、他方では自分で責任を負うこ
>とができる個別的な自覚的個性（意志と意識とを持ち自ら責任を負って自立
>的・独立的に行為することができる個人）であるからです。そのようなものと
>して承認されていようといまいとも……。商品所持者は、相互的に承認される
>前から、交換過程ではそのように振る舞っているのではないのでしょうか？ そ
>もそも交換過程で相互的に承認し合うことができるということ自体、自由な社
>会形成主体であるということを明示していると考えたわけです（赤ん坊は人間
>ですが、人格として交換過程で相互的に承認し合うことはできません）。

と回答したわけです。で、これに対して、神山さんが、“今井が言う「個別的な自覚的個性」かつ「一般的な実践的主体」というのは俺（＝神山さん）が言う「自由な自己意識」と近い”とおっしゃったわけです。

ところが、俺の場合には相互的承認を行うべき主体が既に「個別的な自覚的個性」かつ「一般的な実践的主体」であるのに対して、神山さんの場合には「自由な自己意識」は相互的承認によって初めて発生する——相互的承認の以前には人間は自由な自己意識ではない——はずなのです。われわれの間で、こ

こが決定的に違うはずなのです。何故ならば、神山さんは「〔一般的に、〕人格とは、自由な自己意識ということ」とおっしゃっており、そして、もし相互的承認に先行して商品所持者が「自由な自己意識」であるならば、商品所持者は交換過程に入り込む（eingehehen）時点で人格（当然にここでは商品の人格化としての人格以外にはあり得ないはずです）であるという結論になってしまい、これは神山さんが受け入れられない結論だからなのです。

と言うわけで、神山さんの「自由な自己意識」と俺の「個別的な自覚的個性」かつ「一般的な実践的主体」とはよく似ているようで、恐らくちょっと違うだろう、と。前者は相互的承認によって措定され後者は相互的承認を措定する、と。それだけの話なのです。ちょっと、俺の方がもったいつけた言い回しをしてしまったようです。

神山さんの用語法での「個別的な自覚的個性」かつ「一般的な実践的主体」は神山さんの用語法での「自由な自己意識」と同じであるのかもしれませんが、俺の用語法での前者は神山さんの用語法での後者とは異なるわけです。お互いに同じような用語を用いながら、その意味内容が実際には異なっています。そこで、俺のような混沌頭脳の持ち主は絶えずそのことを確認しないと混乱してしまうので、「近いのだけれども、恐らく違うのでしょう」と申し上げたわけです。説明不足で失礼いたしました。

神山さんは“[ism-study.26] Re:” (1999/08/04 20:42) の中で次のように述べています。——

>人格だから、相互承認できる、というのが今井さんで、商品の行動とし
>て自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格、ゆ
>えに、というのが私です

これに対して、俺は、“[ism-study.28] A Confirmation About Person” (1999/08/04 23:26) の中で、——

>(2)もしそうならば——これは(1)の解答

>が yes である場合のみ生じる質問です——、「商品の行動として自己の行動
>をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」は人格的な振る舞い
>だと思うのですが、商品所持者は、交換過程に eingehehen した瞬間には、まだ

> 「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」を持っていないのですよね？

と質問しました。この質問に対して、神山さんは、“[ism-study.30] Re: A Confirmation About Person” (1999/08/05 12:21) の中で、――

>もっている考えます。

と答えています。

申し訳ありません。ちょっと俺の方に誤解があったようです。と言うか、俺の理論構造に引きつけて神山さんの主張を理解しようとしてしまったようです。そうだとすると、神山さんの場合には、(a) 「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」は、少なくともそれだけでは（つまり相互的承認を経ないと）、人格的な振る舞い（人格の振る舞い）ではないのか、さもなければ(b)商品所持者は交換過程に入り込む(eingehen) 時点で（つまり相互的承認に先行して）、人格として振る舞っているが、まだ商品の人格化ではないのか、このいずれかだと思います。恐らく、神山さんが(b)のように考えているわけではないと思いますから、(a)のように考えているのでしょうか。そういうことですよね？

>人間一物の意識構造、私的所有と

>して区切られる空間の内面構造を、当然維持したまま、交換に入るわけですか。

これは俺にもよく解るのですが、人間と物とのクローズドな領域での話であって――もちろん俺が“[ism-study.20] Re^4: On the "Person" etc .(1)” (1999/08/03 12:21) で強調しているように、オープンな交換過程においてもクローズドな領域の中ではこの構造が持続するのですが――、いずれにせよ、対他的な振る舞いではないと思うのですが、いかがでしょうか？ 俺の場合にも、何度も強調しているように、商品の人格化は交換過程というオープンな領域で（但し相互的承認に先行して）発生するわけです。

神山さんもお承知のように、俺が問題にしているのは、オープンな交換過程

における商品所持者の対他的な振る舞いのことです。交換過程に入り込む(eingehen) 瞬間から身につけている「経済的扮装」は対他的・社会的な扮装ですよね？ 人間と物とのクローズドな関係のお話ではないですよね？

で、肝心の物神崇拜と人格化との関係についてですが、これについてやると、ちょっと論争領域が広がりすぎてしまうような気がします。但し、俺自身の問題意識をご理解いただくために、ほんのちょっとだけ説明しておきます（ますます議論を混乱させてしまうかもしれませんが、議論の背後にある問題意識としてご了承ください）。以下は、神山さんの投稿へのコメントではなく、俺の問題意識の提示だとお考えください。現在、われわれの間で問題になっていることと直接に関連するものではないから、気楽にお読みください。

奥村さんの『株主総会』第1, 2章についての俺のレジュメの図6をご覧いただきたいのですが、俺は、人格化は認識的転倒としての物神崇拜を前提して成立する現実的転倒だと考えています。当然に、物神崇拜が認識的転倒であるという点、物神崇拜が人格化に先行する（逆に言うと人格化は物神崇拜を前提する）という点には、神山さんもお承知いただけると思います[*1]。

[*1]但し、俺がここで用いている物神崇拜は非常に広義で、――ブルジョア社会で物象化によって必然的に措定される認識的転倒という意味で――用いています。だから、これには、商品物神・貨幣物神・資本物神だけではなく、単純商品流通の諸表象をも含めてしまっています。

マルクスのテキストに即しては、やはり神山さんはよくご存じの次の引用をご覧ください。――「生産物が生産者たちの所有者である〔……〕という物神崇拜〔der Fetischismus [...], daß das Product Eigenthümer des Producenten ist〕」（61--63, Teil 6, S.2145）。ここで、「所有者」(Eigenthümer) というのが今一つ解りにくいところですが、大谷さんが個人的所有の再建の論文で書いていたように、「所有物」(Eigentum) の誤記でしょう。また、神山さんは、よくご承知のように資本主義社

会では生産者というのは要するに資本家の単純商品流通に即した規定性のことです。そうだとすると、ここでは、マルクスは単純商品の表象——自己労働に基づく所有——のことを「物神崇拜」と呼んでいることとなります。

その上で、もし敢えて“ひょっとするとここに問題意識の違いがあるのかなぁ”という点を挙げるならば、俺はどうしても物象の人格化は人格の物象化と同様に現実的な転倒である[*1]ということ強調したいのです。恐らく物象の人格化が現実的な転倒であるということ、相互的承認にしても頭の中で“こいつは正当な私的所有者なんだ”と考えるだけではなく、そう考えた上で——そう考えるということ根拠にして——現実的に振る舞う（自由・平等な私的所有者に対する仕方でも相互的に振る舞う——つまり、ドロボーしない、ぶんなぐらない）ということ強調したいのです。（これについても、神山さんと俺との間で違いがあるとは思えないのですが、ここをどうしても強調しなければならないという問題意識の違いがあるのかもしれませんが）。これによって、物象化と人格化との矛盾、そしてそれを通じて物象化と物神崇拜との矛盾を考えていきたいと思っています。（もちろん、俺の問題意識を神山さんに押し付けようとしているわけでは決してありません）。

[*1]こういう問題意識をおれが抱くようになったのは、神山さんもよくご存じのマルクスの次のテキストにヒントを得たことでした。——「とは言っても、利潤率を通じての移行を媒介として剰余価値が利潤という形態に転化させられる仕方は、生産過程に既に起こっている主体と客体との転倒のいっそうの発展であるのに過ぎない。既にそこで〔＝生産過程で〕われわれは、どのようにして労働の社会的生産力の全部が資本の生産力として表示されるのかということを見た。一方では、価値——生きていた労働を支配する過去の労働——が資本家という形で人格化される。他方では、逆に、労働者が、単に対象的であるのに過ぎない労働能力として、商品として

現れる。転倒した関係に照応して、既に本来的な生産過程そのものにおいて、〔転倒した関係に〕照応的に転倒した表象、移調した意識が必然的に発生するのであり、この意識は本来的な流過程の諸転化と諸変容とによっていっそう発展させられるのである〔Die Art, wie mittelst des Uebergangs durch die Proftrate der Mehrwerth in die Form des Profits verwandelt wird, ist jedoch nur die Weiterentwicklung der schon während des Productionsprocesses vorgehenden Verkehrung von Subjekt und Objekt. Schon hier sahen wir wie sämtliche gesellschaftliche Productivkräfte der Arbeit sich als Productivkräfte des Capitals darstellen. Einerseits wird der Werth, die vergangne Arbeit --- die die lebendige beherrscht --- im Capitalisten personificirt; andererseits erscheint umgekehrt der Arbeiter als blos gegenständliches Arbeitsvermögen, Waare. Dem verkehrten Verhältniß entsprechend, entspringt nothwendig schon im eigentlichen Productionsprozeß selbst entsprechend verkehrte Vorstellung, transponirtes Bewußtsein, das durch die Verwandlungen und Modificationen des eigentlichen Circulationsprocesses weiter entwickelt wird〕（Hm, S.61; Vgl. auch 61--63, Teil 5, S.1604）。

神山さんもお存じのように、ここでは、現実的転倒と認識的転倒とがマルクス自身によって明瞭に区別されているわけです。「主体と客体との転倒」〔die Verkehrung von Subjekt und Objekt〕あるいは「転倒した関係」〔das verkehrte [...] Verhältniß〕が現実的転倒であり、「照応的に転

倒した表象」([die] entsprechend verkehrte Vorstellung)あるいは「移調した意識」([das] transponiertes Bewußtsein)が認識的転倒です。認識的転倒は現実的転倒から「発生」(entspringen)し、且つ——差し当たって——現実的転倒に「照応」(entsprechen)するわけです(後には矛盾するはずです)。俺が着目するのは、「資本家という形で人格化される」(im Capitalisten personifiziert)という箇所から解る通り、人格の物象化と同様に、物象の人格化もまた現実的転倒であるということなのですね。認識的転倒は物象の人格化からは区別されるということなのです。

さて、上記のような発生的な関連を強調したい俺の問題意識からすると、神山さんがおっしゃる——

>価値形態論の局面と交換過程論の局面との区別は、商品の能動性の媒介
>としての価値形態の産出と、人間の欲望満足行動を介した商品相互の実現
>と考えますが(これはまた別の機会の論題で)、とりあえず、区別がある
>ことが分ればいいのではないのでしょうか。

の中で「とりあえず、区別がある」というところが非常に重要になってくるわけです。「商品の能動性の媒介としての価値形態」——つまり物象化とその発展——を取り扱う価値形態論と、認識的転倒(ここでは狭義の物神崇拜、商品の物神的性格)を物象化という根拠によって暴露する物神性論と、人格化を取り扱う交換過程論との区別が、上記の発生的な関連の区別に照応しているわけです。但し、どのように照応しているのか、今一つよく解らないから、悩んでいるわけです。

もちろん、神山さんが「これはまた別の機会の論題で」と述べている(しかも当座の問題とは直接的には無関係である)以上、このことに触れるのはフェアではありません。ですが、なんで俺が“[ism-study.29] An Answer To 3 Questions”(1999/08/05 9:48)の中で、物象化の局面と人格化の局面との話

をしている時に、口を滑らせて「価値形態論の局面と交換過程論の局面とが、従ってまた物象化の局面と人格化の局面」などと言ったのかということ、俺の問題意識から言い訳したかったのです。長々申し訳ありませんでした。

参照文献

Hm, Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863--1865) Drittes Buch, In: MEGA² II/4.2
61--63, Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861--1863), In: MEGA² II/3

[ism-study.34] Re: Re²: A Confirmation About Person

投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/05 23:29:30
修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.33] Re²: A Confirmation About Person
投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/05 17:53:38

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.37] Re ⁴ : A Confirmation About Person	今井 祐之	1999/08/06 09:52:55

今井さん、ismのみなさん、神山です。
今井さん、またまた長文のご投稿感謝いたします。

>>一方では社会を形成する一般的な実践的主体（相互的承認において
>>他の人格を承認することができる個人）であり、他方では自分で責任を負うこ
>>とができる個別的な自覚的個性（意志と意識とを持ち自ら責任を負って自立
>>的・独立的に行うことができる個人）であるからです。そのようなものと
>>して承認されていようといまいとも……。商品所持者は、相互的に承認される
>>前から、交換過程ではそのように振る舞っているのではないのでしょうか？ そ
>>もそも交換過程で相互的に承認し合うことができるということ自体、自由な社
>>会形成主体であるということを明示していると考えたわけですが（赤ん坊は人間
>>ですが、人格として交換過程で相互的に承認し合うことはできません）。

>
> と回答したわけです。で、これに対して、神山さんが、“今井が言う「個別的
> な自覚的個性」かつ「一般的な実践的主体」というのは俺（＝神山さん）が
> 言う「自由な自己意識」と近い”とおっしゃったわけです。
> ところが、俺の場合には相互的承認を行うべき主体が既に「個別的な自覚的
> 個性」かつ「一般的な実践的主体」であるのに対して、神山さんの場合には
> 「自由な自己意識」は相互的承認によって初めて発生する——相互的承認の以
> 前には人間は自由な自己意識ではない——はずなのです。われわれの間で、こ
> こが決定的に違うはずなのです。何故ならば、神山さんは「〔一般的に、〕人
> 格とは、自由な自己意識ということ”とおっしゃっており、そして、もし相互
> 的承認に先行して商品所持者が「自由な自己意識」であるならば、商品所持者
> は交換過程に入り込む（eingehen）時点で人格（当然にここでは商品の人格化
> としての人格以外にはあり得ないはずですが）であるという結論になってしま
> い、これは神山さんが受け入れられない結論だからなのです。

わかりました。

「自由な自己意識」＝人格、という表現がややこしくなった原因かもしれ
ませんね。自由な自己意識性が労働そのものの内的在り方なら、人格が
先にある、ことになりますね。（ただそうとつても、それも、労働におい
ては、疎外されそれは否定されていますが）。

ここでは、今井さんとの対比からして、個別の意識性に対して、それを
媒介する、産出された対他的な社会的意識を介した規定を、人格とする、
というように限定、強調しておくのが、有益な整理になるでしょう。

労働・社会関係・個々の意識性。

一般的にこういえるとおもいます。これを敷衍して、自由な自己意識性
を担保する、社会関係は、諸主体が孤立しあい、関係を物象化している私
的生産の関係である、これが人格である、とすれば、今井説になると思わ
れます。

相互承認以前の、「交換過程に eingehen」する、孤立的な人間の「事実
的」な振舞い、ここに物象の人格化、自由な人格性がある。これが（私の
読んだ）今井説。承認以前の事実上の人間の恣意（＝「自由」）を、法
的人格に先立つ人格とする。

これに対して、神山説は、人格に、承認性を不可欠に考えてみている。
こんなかんじです。

>
>>人格だから、相互承認できる、というのが今井さんで、商品の行動とし
>>て自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格、ゆ
>>えに、というのが私です

>
> これに対して、俺は、“[ism-study.28] A Confirmation About Person”
> (1999/08/04 23:26) の中で、——

>
>>(2)もしそうならば——これは(1)の解答
>>が yes である場合にのみ生じる質問です——、「商品の行動として自己の行動
>>をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」は人格的な振る舞い
>>だと思うのですが、商品所持者は、交換過程に eingehen した瞬間には、まだ
>>「商品の行動として自己の行動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意
>>識的性格」を持っていないのですよね？

>
> と質問しました。この質問に対して、神山さんは、“[ism-study.30] Re: A
> Confirmation About Person” (1999/08/05 12:21) の中で、——

>
>>もっている考えます。
>

> と答えています。

> 申し訳ありません。ちょっと俺の方に誤解があったようです。と言うか、俺

> の理論構造に引きつけて神山さんの主張を理解しようとしてしまったようで

> す。そうだとすると、神山さんの場合には、(a)「商品の行動として自己の行

> 動をする疎外された自己性、人間行動の媒介的意識的性格」は、少なくともそ

> れだけでは（つまり相互的承認を経ないと）、人格的な振る舞い（人格の振る

> 舞い）ではないのか、さもなければ(b)商品所持者は交換過程に入り込む

> (eingehen) 時点で（つまり相互的承認に先行して）、人格として振る舞って

> いるが、まだ商品の人格化ではないのか、このいずれかだと思います。恐ら

> く、神山さんが(b)のように考えているわけではないと思いますから、(a)のよう

> に考えているのでしょうか。そういうことですよ？

そうです。この自己を自己として、この物を自己の物として、行動するのは、「人間」の契機であり、もちろんそれは、対他的関係を予定しており、完結しないわけですが、承認に 관련된 規定が「人格」である、こう私は、かんがえてみているわけです。

>

>>人間一物の意識構造、私的所有と

>>して区切られる空間の内面構造を、当然維持したまま、交換に入るわけで

>>す。

>

> これは俺にもよく解るのですが、人間と物とのクローズドな領域での話であ

> って——もちろん俺が“[ism-study.20] Re^4: On the "Person" etc .(1)

> ” (1999/08/03 12:21) で強調しているように、オープンな交換過程において

> もクローズドな領域の中ではこの構造が持続するのですが——、いずれにせ

> よ、対他的な振る舞いではないと思うのですが、いかがでしょうか？

そのとおりですね。

> 俺の場

> 合にも、何度も強調しているように、商品の人格化は交換過程というオープン

> な領域で（但し相互的承認に先行して）発生するわけです。

今井さんも、人格は「オープン」に対他的にかんがえている点、確認できました。

ただそれは、相互承認に先行する、関係行為なわけですね。

「結局、相互承認する1つの『交換過程というオープンな領域』なのだから、相互承認に先行する人間の振舞いを取り出す意味はないのでは」とはかんがえないわけですね。「結局、対面して相手に反射して、人格であることをみとめあうのだから、ここで人格の後先は重要ではない」とは考えないことになるのですね。会うべき他人を想定している時点（交換の相手を探す）で、人格としての能動性があるわけですね。

いわずもがなですが。もちろん、「相互承認」とは、即、商談をまとめること、ではありません。発展した法体系を前提して、「商談が失敗した」「だから、相互承認しなかった」というレベルの相互承認ではありません。自由な交換主体として、原始接触して、交換を媒介することです。（もしかしたら、これは説明不足で混乱のもとになるかも）。

> 奥村さんの『株主総会』第1, 2章についての俺のレジユメの図6をご覧いた

> だきたいのですが、俺は、人格化は認識的転倒としての物神崇拜を前提して成

> 立する現実的転倒だと考えています。当然に、物神崇拜が認識的転倒であると

> いう点、物神崇拜が人格化に先行する（逆に言うと人格化は物神崇拜を前提す

> る）という点には、神山さんもご了解いただけたと思います[*1]。

>

>

> その上で、もし敢えて“ひょつとするとここに問題意識の違いがあるのかな

> あ”という点を挙げるならば、俺はどうしても物象の人格化は人格の物象化と

> 同様に現実的な転倒である[*1]ということを強調したいのですね。恐らく物象

> の人格化が現実的な転倒であるということ、相互的承認にしても頭の中で“こ

> いつは正当な私的所有者なんだ”と考えるだけではなく、そう考えた上で——

> そう考えるということ根拠にして——現実的に振る舞う（自由・平等な私的
> 所有者に対する仕方相互的に振る舞う——つまり、ドロボーしない、ぶんな
> ぐらない）ということ強調したいのです。（これについても、神山さんと俺
> との間で違いがあるとは思えないのですが、ここをどうしても強調しなければ
> ならないという問題意識に違いがあるのかもしれませんが）。これによって、物
> 象化と人格化との矛盾、そしてそれを通じて物象化と物神崇拜との矛盾を考え
> ていきたいと思っているわけです。

物神崇拜という当事者の知的受容を契機としつつ、物象の人格化が貫くと私は考えます。自由な主観性は、現実世界・対象に存立するのであって、対象は、単なる、知に対応した隠蔽構造ではない。これはいわゆる「物象化論」の批判の軸だとも思います。

あるいは、いいかえれば、対象世界は、人格に対応した、人格を含まない世界ではない、と。

労働する人間の顛倒した振舞いが、リアルに、存在構造を産出しているのである、と。

今井さんとはちょっとずれていると思われる個所もありますが、問題意識はほとんど同じだといっていいでしょう。

>>価値形態論の局面と交換過程論の局面との区別は、商品の能動性の媒介
>>としての価値形態の産出と、人間の欲望満足行動を介した商品相互の実現
>>と考えますが（これはまた別の機会の論題で）、とりあえず、区別がある
>>ことが分ればいいのではないのでしょうか。

> の中で「とりあえず、区別がある」というところが非常に重要になってくるわけです。「商品の能動性の媒介としての価値形態」——つまり物象化とその発展——を取り扱う価値形態論と、認識的転倒（ここでは狭義の物神崇拜、商品の物神的性格）を物象化という根拠によって暴露する物神性論と、人格化を取り扱う交換過程論との区別が、上記の発生的な関連の区別に照応しているわけです。但し、どのように照応しているのか、今一つよく解らないから、悩んでいるわけです。

私も悩んでいるところです。厳密に発生的という点も大賛成です。

> もちろん、神山さんが「これはまた別の機会の論題で」と述べている（しかも当座の問題とは直接的には無関係である）以上、このことに触れるのはフェアではありません。

単に、読まれている皆さんにとって、ちょっと論点がおおすぎやしないかとおもっただけです。というより、ご発言を規制するつもりはなく、論点を絞って今井さんの問題意識を伺いたかったもので。またいずれいたしましょう。

今井さんのおかげで、ずいぶんと私も捕え方が具体化されました。ありがとうございます。実家に帰ると、パソコンがないので、毎日私は私も書込みできなくなりそうです。

皆さん、何でもいいから、どしどし発言して、書きこんでメールボックスいっぱいにしてください。

[ism-study.35] Re: Re^2: A Confirmation About Person

投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/06 01:42:00
修正日時： ——

元発言

元発言はありません。

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.41] Re^4: A Confirmation About Person [PS][Resent]	今井 祐之	1999/08/06 20:50:42

神山です。すみません。ひとつだけ書き忘れてしまいました。

今井さんへ：

議論を整理するために、また、研究会の皆さんにわかりやすく問題を再確認するために、お手数ですが、ひとつ、端的な確認の質問をさせていただきます。

物象の人格化は、交換過程の局面に捕らえられます。これは私も今井さんも同じです。
では、最初の今井さんの

>(1)個人的な私的所有者は真の人格なのかということになる。そんなわけはな

>いのであって、個人的な私的所有者は物象の人格化であり、ほかならないこの

>物象というものを指定する人格があるはずである。だから、個人的な私的所有

>者は人格ではあるが、物象の人格化としての人格、物象としての人格である。

[ism-study.6]

という問題設定に対する解答は、どうなったと考えればよいのでしょうか。

「物象というものを指定する人格」〔社会的実践主体〕は、結局、どう考えられることになったのでしょうか、端的にお答え頂けるとありがたいのですが。

1. 新しいご投稿では、物象の人格化が、交換過程に入った瞬間の当事者についてなりたつ、とされています。

2. とすれば、この人格は[ism-study.6]にいうこの「物象を指定する人格」ではありませんね。

3. [ism-study.6]の「個人的な私的所有者」を〔相互承認された商品所持者〕と考え、これが「物象の人格化」であるとするれば、それにさきだつ交換過程に入った瞬間の当事者が、実践的な、この人格化する「物象を指定する人格」ということになるのかもしれませんが、やはりその人格も、物象の人格化である、ことになってしまいますよね。

と思いつきで、うまく伝えられているか自信がなく、恐縮ですが、循環論法から結局脱却できたのでしょうか。

しつこくなり、すみませんが、ぜひお伺いしたく、恐縮ですが、よろしくお願い致します。

[ism-study.36] Re ^ 2: An Answer To 3 Questions

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/06 09:52:51
修正日時： —

元発言

表題： [ism-study.31] Re: An Answer To 3 Questions

投稿者： 神山 義治

投稿日時： 1999/08/05 12:22:01

コメント

コメントはありません。

神山さん、ISM 研究会の皆さん、今井です。

>たしかに物象化とは、人格の物象化なのですが、それは、より大きい
>えば、生産関係の物象化ですね。

「大きいえば」と言うのがよく解りませんが、大きく言おうと小さく言おうと、人格の物象化というのは人格的生产関係——諸人格的生产関係——のこ

とです。だからこそ、人格なんて所詮はペルソナっていうのが説得力をもっているわけです。廣松さんの見解は異常でもなんでもなく、健全な社会常識だと思います。異常なのは、ただ、廣松さんがマルクス主義者流に“ペルソナは階級的な個人だ”と主張するというくらいのもんだと思います。

それでは、こう言い換えましょう。——「諸人格の生産関係」と言う場合の人格とは一体なになのですか？ 物象でもないし、物象の人格化でもないですよ？ 俺の場合には、これこそが現象する——但し否定的に、疎外されて現象する——べき類の本質あるいは労働する人格なのです。

>第1章第4節の人間はもちろん人格化とはよば

>ないのですよね

もし「第1章第4節の人間」というのが人間と物とのクローズドな関係において“商品は生まれながらに価値を持つ”というように価値を物の属性として知覚的に把握する人間のことを指しているのであれば、はい、呼びません。繰り返しになりますが、俺が言う商品の人格化とは交換過程というオープンな場面で発生します。

>あくまでも、

>疎外であり、矛盾、あるけどない、ですよ。だから、人格＝「仮象」説
>に対して、物象化を措定する、物象化に先立つ人格がある、先に人格がな
>なければいけない、と強調することは、かえって、広松説に引きずられはし
>ないか、今井さんの問題意識に即しても、疑問の余地が生じるようにおも
>われます。

第一に、「あるけどない」人格とは何であるのかということが問題なのです。もしこれがアンサンブルであるならば、物象化の構造は完結してしまいます。実現されるべきアンサンブルに始まって（物象化するべき人格）、実現されたアンサンブルに終わってしまいます（人格化としての人格）。より正確に言うと、始まりも終わりもない、こうして、廣松説は正しい。——こういうことになってしまいます。違いますか？

第二に、「あるけどない」そのあり方の区別が問題なのです。神山さんの理

論構造に即して言っても、「あるけどない」ということだけについて言えば、物象の人格化としての人格——神山さんの場合には相互的承認において形成される——も「あるけどない」人格でしょう。なにしろ、人格と言っても物象の人格化なのですから。違いますか？

こうして、俺にとっては、問題は「あるけどない」ということを大前提にした上で、その「あるけどない」ものの自己疎外の構造、転倒の構造を明確にし、その上で「あるけどない」ものの中での自己区別をつけることになるわけです。

[ism-study.37] Re ^4: A Confirmation About Person

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/06 9:52:55
修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.34] Re: Re^2: A Confirmation About Person
投稿者： 神山 義治
投稿日時： 1999/08/05 23:29:30

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.39] Re: Re^4: A Confirmation About Person	神山 義治	1999/08/06 11:45:48

神山さん、ISM研究会の皆さん、今井です。神山さん、整理していただきどうもありがとうございます。

最初にお詫びから。

>単に、読まれている皆さんにとって、ちょっと論点がおおすぎやしない
>かとおもっただけです。

誠におっしゃる通りです。俺が次から次へと論点を出してしまいました。まあ、神山さん風に言うると、俺の中では全部ワンセットで繋がっているからなのですが。でも、恐らくこのメーリングリストをご覧になっている皆さんにとっては、論点が多すぎると思います。これはちょっと反省しています。

> 「自由な自己意識」=人格、という表現がややこしくなった原因かもし
> れませんね。自由な自己意識性が労働そのものの内的在り方なら、人格が
> 先にある、ことになりますね。(ただそうとつても、それも、労働におい
> ては、疎外されそれは否定されていますが)。

おっしゃる通り、俺は類の本質=人格として把握し、類的本質=労働する人格として把握するから、俺の議論では「人格が先にある」ということになるわけです。そして、一言だけ補足すると——これは神山さんにも同意していただけはずですが——、「それも、労働においては、疎外されそれは否定されてい」とは言っても、正にこの否定された形態、正にこの疎外された形態において産出されているわけです。それどころか、徹底的に自己否定し得るということ、徹底的に自己疎外し得るといことこそが、類の本質のリアリティ（類の本質の類的たる所以）であるわけです。

但し、これは結局のところ、資本の生産過程の理解を前提するのです。自己疎外した労働の振る舞い（第5章第2節以降）——いやそれ以前に自己疎外し得る労働の振る舞い（第5章第1節）——を前提しないことには、いくら俺が“物象化するべき人格の生産関係とは類の本質の関係のことだ”と言ったところで単なる断言であるのに過ぎません。で、これを前提した上で単純な商品流通を捉え返してみよう——こういうわけなのです。

> 「結局、相互承認する1つの『交換過程というオープンな領域』なのだ
> から、相互承認に先行する人間の振舞いを取り出す意味はないのでは」とは
> かんがえないわけですね。

考えません。俺の場合には、相互的承認の根拠とプロセスとが問題だからです。

> 「結局、対面して相手に反射して、人格である
> ことをみとめあうのだから、ここで人格の後先は重要ではない」とは考え
> ないことになるのですね。

考えないことになります。理由は同上。

俺の場合には、商品所持者は物象の人格化として人格だからこそ、相互的承認をすることができ、またこの相互的承認によって自己が人格であるということを実証するのに対して、神山さんの場合には、商品所持者は相互的に承認したからこそ、物象の人格化になるわけですね。

これをやると議論が混乱するだけだから、これまで申し上げていませんでしたが、一応、どうして「相互的承認の根拠とプロセス」を問題にするのか、という問題意識[*1]を明らかにしておきます。相当、話がぶっ飛びますので、お許しください。以下の部分は神山さんの投稿に対するコメントではありません。恐らく、皆さんに、直ちに理解していただくというわけにはいかないでしょう。実際にまた、総てを詳しく説明していると大変なことになりますので、あくまでもエッセンスだけをお話ししますから、ますますもって解りにくいと思います。皆さん、どうか軽く読み飛ばしてください（もちろん、質問とかがあればお答えいたします）。

[*1]ちょっとややこしいのですが、そもそも“どうして「相互的承認の根拠とプロセス」を明らかにするということが、交換過程に *eingehen* した瞬間に成立している商品の人格化と、相互的承認によるその実証とを区別するのか”という問題意識だったわけです。ですから、どうして「相互的承認の根拠とプロセス」を問題にするのかという問題意識は、“問題意識の問題意識”です。まあ、対象はハッキリしているから、“問題意識の問題意識”まで明らかにする必要もないのかもしれませんが、また、もちろん、このような問題意識を全く共有してい

なくても十分に議論が可能であるはずです。

『資本論』の交換過程論では、相互的承認については実に簡潔な説明になっています。で、正直に言って、俺はどうもこの相互的承認ってヤツがよく解らないのです。特に、価値形態の回り道との関連がさっぱり解りません。

価値形態論では、リンネルが上着を自己に等置するわけですが、この等置によって初めて価値が発生するわけではなく、上着もリンネルも価値だからこそ上着を等置し得るわけです。但し、上着は価値の本質として等置されるわけではなく、価値物——価値の実存形態——として等置されるわけです。この等置において、リンネルは上着を価値の現象形態にし、これを通じて自分もまた価値であるということを表示するわけです。対他関係を通じて、自己関係に至るわけです。

さて、商品という物象的な主体に即してのこのような振る舞いは、言うまでもありませんが、人格の物象的な振る舞い、物象化された振る舞い、物象としての振る舞い、商品としての振る舞いにほかなりません。物 (Ding) としての商品がそのような振る舞いをするわけではないのです。「相対的価値形態の内実」でのペーター・パウルの話はなんら文学的な譬え話ではないと考えています (但し、ペーター・パウルの話は交換過程における話ではありません。あくまでも人間の同等性関連の話です)。

そこで、交換過程論での相互的承認においても、各商品所持者は交換相手を自由・平等な私的所有者として認めるということを通じて自己をそのようなものとして妥当させようとしていると考えているわけです。それが相互的に行われているのが相互的承認であると考え次第です。但し、もちろん、交換過程での振る舞いは(1)自覚的・人格的である (物象の振る舞いではなく人格の振る舞いである) という点、そして(2)相互的であるという点で、価値形態論における商品の振る舞いからは完全に区別されます。形式的には、この点で、諸人格の相互的承認は商品の一方的宣言からは区別されると考えるわけです。

そう考えてみますと、相互的承認においても、相手を人格としていわば“等置”するためには、相手が既に人格でなければならないであろう (相手が既に人格であるということはもちろん相互的承認においては互いが既に人格であるということの意味します)。で、当然に、この場合の人格は、物象化するべき人格 (価値の本質) なんてものではなく、その現実化=現実性剥奪であるところ

の、物象の人格化としての人格 (価値の実存形態) でなければならないであろう。だって、それしか、単純商品流通に既存の人格はあり得ないのですから。こうして、相互的承認によって、商品の人格化としての商品所持者たちは自己が人格であるということを実証するのであろう——こう考えたわけです。

問題意識を見れば、まあ、価値形態論とのアナロジーから出発しているわけです。ですが、上に述べたように、商品の関係行為の態様と人格の関係行為の態様とがうまく区別できていない以上、一方的・物象的であるのか相互的・人格的であるのかという明白な区別を前提にした上で、アナロジーから出発してみようというわけです。

こういうわけで、“そもそも人間一般が、そのままの資格で、流過程で相互的承認なんかできるのかいな、物象化の人格として既に人格であるからこそ、相互的承認することができるんじゃないかな”と考えているわけです。

殆ど珍説に近いと思いますが、価値形態論における商品の自己疎外的な関係行為と、交換過程論における人格の自己疎外的な関係行為との関連が俺自身の中でうまく決着されれば、きっとこういう珍説は俺の混乱した頭脳の中から消えてなくなるのでしょうか。

[ism-study.38] Re ^ 6: On "New Liberalism" etc.

投稿者： 今井 祐之
投稿日時： 1999/08/06 9:53:03
修正日時： —

元発言

表題： [ism-study.25] Re: On "New Liberalism" etc.
投稿者： 窪西 保人
投稿日時： 1999/08/04 12:33:15

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.42] Re^7: On "New Liberalism" etc.	今井 祐之	1999/08/07 14:47:54
[ism-study.43] Re: On "New Liberalism" etc.	窪西 保人	1999/08/07 18:04:24

窪西君，神山さん，今井です。

>新自由主義についてですが、これは自由主義といえるのだろうかと思ったりし
>ます。新自由主義のばあい、自由は効率性達成のための手段にすぎず、目的では
>ないように思うのですけど。

この点は，“[ism-study.11] Re^2: On "New Liberalism" etc.”
(1999/07/27 17:11) 及び“[ism-study.13] Re^4: On "New Liberalism"
etc.” (1999/07/28 20:25) で述べられていた「相互的転回」を念頭に置いた
発言だと思います。そこで、俺が述べていた相互的転回は、乱暴に言うと、
“効率性重視のマルクス主義・社民主義・ケインズ主義が公正性重視に転回し
てしまい、公正性重視の新自由主義が効率性重視に転回してしまった”[*1]と
いうものでした。

[*1]もちろん、もともとマルクス主義・社民主義・ケ
インズ主義にも公正性重視の側面があったし、転回した現
在でも効率性重視の側面を捨ててはいません。同様にま
た、もともと新自由主義にも効率性重視の側面があった
し、転回した現在でも公正性重視の側面を捨ててはいな
いわけです。但し、現在の“大きな政府か小さな政府
か”という議論を見ていると、やはり互いの主張のポイ
ントは相互的に転回してしまっているわけです。

少なくとも新自由主義“政策”について言うと、「自由は効率性達成のため
の手段」にさえなっていないんじゃないですか。効率性達成（社会的な規模で
の資本の金儲け）のためならば自由でも反自由でもどっちでもいいというのが
ホンネの部分なんじゃないかと思えます。ところが、効率性追及の無制限な承認
（効率性を追及するためなら、自由なんてじゃんじゃん弾圧してもいい；労
働者なんて大量失業の下でじゃんじゃん餓死すりゃいい）はイデオロギーとし
ては（社会統合の自覚的原理としては）成立しませんよね。そこで弁護論とし
て登場していく（本人たちの意図からは独立的に）のが新自由主義“思想”
であると思うのです。

>「自由・平等・所有」に続けてマルクスは「ベンサム」を並べてますが、ぼく
>はこの「ベンサム」が妙にひっかかります。

俺も『資本論』でどうしてベンサムが入ってきたのか、長いあいだ悩んでき
ました。窪西君はよくご承知のように、『原初稿』なんかでは、自由・平等・
所有の三位一体ですっきりしているわけです。今でもハッキリした解答を持っ
ていないのですが、一応、試論を述べておきます。

自由（個性性）と平等（一般性）とを媒介的に統一しなければならないはず
であったのが市場社会そのもの（単純な商品流通そのもの）に即しては（私
的）所有、（フランス革命の）イデオロギー的スローガン——社会統合原理
——においては博愛であったわけです。とは言っても、社会契約論の立場に立
てば、あくまでも個人的な私的所有者こそが社会形成の主体であり、個人的な
私的所有こそが社会統合原理であったはずで。自由と平等とは、個性性と一
般性とは全く対立なく三位一体の項目をなしていたはずで[*1]。これに対し
て、フランス革命のスローガンにおいては、自由と平等とが、個性性と一般性
とが対立しているということの予感があります。もっと俗っぽく言うと、自由
主義的貴族と第三市民とプロレタリアとが階級対立しているということの予感
があります。だからこそ、三色旗が必要だったわけです。その意味では、政治
的な社会統合においては、もはや単純な商品流通の諸表象では隠蔽しきれない
資本主義的生産のリアリティが露出してしまっていると考えることができま
す。

[*1]こんな偉そうなことを言っている俺は、実は、社会
契約説についてはよく知りません。詳しい方、補足なり
反論なりをお願いいたします。「はずです」という表現
形式は、厳密なテキストクリティークに基づいていない
不安の表明だとお考えください。

さて、窪西君もご存じのように、『経済学批判要綱』の「貨幣の資本への転
化」でも、現行版『資本論』の「貨幣の資本への転化」でベンサムについて記
述しているのと同じような内容はあるわけです（『原初稿』にもほぼ同様な記

述があります)。『経済学批判要綱』の「貨幣の資本への転化」は、「経済的な形態、すなわち交換があらゆる面で諸主体の平等を措定するのに対して、内容、すなわち〔諸主体を〕交換に駆り立てる個人的でも物象的でもある素材は自由を措定する」(Gr, S.)——簡単に言うと交換という形態が平等を措定し、交換の内容が自由を措定する——ということを明らかにするために、先ず平等を、次に自由を考察しています。もちろん、自由・平等な私的所有者という形態で両者を媒介するのが私的所有であるわけです。

先ず、平等性 (Gleichheit) の契機について、交換によって、主体 (商品所持者) は、——

Gleiche (同等なもの) ——客体 (商品) に即しては Equivalente (等価のもの)

↓

Gleichgeltende (等しいものとして妥当するもの)

↓

Gleichgültige (互いに無関心な、没交渉なもの)

というように、次々と規定されていきます。ベンサムは正にこの「無関心なもの」(Gleichgültige) に関わっているわけです。取り敢えず、形式的平等の形式化 (= 形骸化) が単純商品流通の枠内で行き着いた先が没交渉性 (Gleichgültigkeit), 自分のことしか考えない私利私欲の塊だと俺は考えます。

それでは、この没交渉性は専ら平等にのみ関わっているのかと言うとそんなことはないですね。もう一方の極である自由を考察しても、やはりこの没交渉性が出てくるわけです。自由な人格たちは相互的承認を通じて暴力を用いずに自由意志で互いに自己の商品を譲渡しあうわけです。どの人格も端的に交換相手を手段化する (自己の単なる手段にする) わけですが、しかしこの関係が相互的であるためには互いにとって互いが単なる手段になっていなければなりません。こうして、自己目的としての自己と単なる手段——「外面的な必然性」(Einleitung, S.22) ——としての自己とに自己を分裂させるということによって相互的な (とは言っても形式的・外面的な) 振る舞いが可能になるわけです。交換は相互的な振る舞いであるからこそ、このような手段化が意味しているのは諸人格の相互的な手段化です。こうして、諸人格は動機としては利

己的な利益だけを追究していながら、事実としては、事実に、事実上、相互的な利益を——そして交換の連鎖を通じて共同社会的 (gemeinschaftlich) 利益あるいは一般的な利益——を達成しているわけです。「一般的な利益とは正に利己的な [selbstsüchtig] 諸利益の一般性のことである」(Gr, S.168)。社会的なシステムが単純商品流通として現れている限りでは、これ自体は別に幻想ではありません。ま、資本主義的生産としてはこういう予定調和はぶっ壊されてしまうのですが.....。

こうして、現行版『資本論』の“ベンサム”も、やはり私的所有とか博愛とかと同様に、自由と平等とを媒介する媒介項であるはずなのです。全然論証にもなんにもなっていないんですが、試論としては、現行版『資本論』の「貨幣の資本への転化」でも自由と平等という極があって、但しこれを媒介する媒介項として (個人的な私的) 所有とベンサムとの二つが叙述されていると断言しておきます。まあ、試論なんだから、このくらい大ぼらを吹いておいた方がいいでしょう。

それでは、一体、ベンサムはどういう媒介項なのか。これについてはまだ結論が出ていないので、もう少し時間をください。

>複雑系経

>済学に至ると、個人の自由など幻想だと言って新古典派を攻撃する。でも市場と>いうシステムでしか世の中うまくいかない (みたい) だから、これが浅知恵の人>間にはちょうどお似合いなんだ、と開きなおっているわけです。

でも人間が浅知恵だってことは絶対に論証することができない。だから、頭ごなしに断言するしかない。

彼らの前提については、神山さんが“[ism-study.32] Re: On "New Liberalism" etc.” (1999/08/05 12:22) で述べているとおりでと思います。要するに、批判しているはずの当の土俵に自分で乗っちゃっているわけです。

>個々の課題で勝利することは二次的な重要性しかもたない、と
>いう答えかたもあると思います。

『共産党宣言』の以下の記述を念頭においての発言だと思います。——

「労働者たちは時には勝利を得るが、それはほんの一時であるのに過ぎない。彼らの闘争の本来的な結果は直接的な成果ではなく、労働者たちの団結がますます拡大するというところにある [Von Zeit zu Zeit siegen die Arbeiter, aber nur vorübergehend. Das eigentliche Resultat ihrer Kämpfe ist nicht der unmittelbare Erfolg, sondern die immer weiter um sich greifende Vereinigung der Arbeiter]」(Manifest, S.471)。

闘争の目標は「個々の課題で勝利すること」であって、それ以外のものではないかと思えます。「団結を目指して闘争する」なんてのは大馬鹿野郎です。そんな闘争は結局のところ団結を勝ち取ることもできないでしょう。窪西君がおっしゃる通り、団結を勝ち取るためには、「個々の課題で勝利すること」を目標にして戦うしかないとします。

ただ、まあ、現実問題、総ての闘争に勝利を取めることはできるなんてことはあり得ないわけです。それどころか、多くの闘争で敗北せざるを得ないわけです。だからこそ、「本来的な結果」は団結（資本の生産過程で事実的・無自覚的・物象的に形成されている社会性を、最初は先ず、取り敢えずは、階級の内部で公然と承認していくということ）になるわけです。

>団結の輪をひろげるためにも個々の課題でたたかわなければなりません。
>ん。

おっしゃる通りだと思います。寝てて団結が広がるなら苦労はありません。

>また、個々の課題で無限後退しながら「合理化や自由化はいずれ生産の社会
>化を進展させ、階級対立を激化させるであろう」と言うだけでは、闘争回避の言
>い訳のようになりかねません。

端的な敗北主義ですね。

>金融危機への対処の仕方を取ると、一方で銀行の公共性を重視し「金を出
>すかわりに口も出す」、公金投入を認めるかわりに議会在銀行経営に口を出す、

>という政策があります。

俺はこっちをとりますね。破滅するぞと言って破滅するよりも、破滅を避けましようと言って破滅の方が資本主義の限界を暴露するのに役立ちます。それに将来のリスク極小型社会（プロ独のこと）にとっても、いい経験になります。所詮プロ独では、市場を利用して市場を止揚していかなければならないわけですから。

>民主党の“市民的公共性”

>と新左翼の階級闘争路線のどちらかを取れと言われれば

これしか選択肢がないという仮定ですか？ それはかなり絶望的な仮定ですね。

>現実の選択肢から選ぶとなると

新左翼を公然と支援し、民主党を隠然と支援するってのは、どうでしょう。なにも二者択一しなければならぬってことはありません。二枚舌で行きましょう。リスク回避、リスク回避。

参考文献

Einleitung, Einleitung zu den „Grundrissen der Kritik der politischen Ökonomie“, In: MEGA² II/1.1.

Gr, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie,

Ökonomisches Manuskripte 1857/58, In: MEGA² II/1.1--1.2.

Manifest, Manifest der Kommunistischen Partei, In MEW, Bd. 4.

[ism-study.39] Re: Re⁴: A Confirmation About Person

投稿者： 神山 義治

投稿日時： 1999/08/06 11:45:48

修正日時： —

元発言

表題： [ism-study.37] Re^4: A Confirmation About Person

投稿者： 今井 祐之

投稿日時： 1999/08/06 09:52:55

コメント

表題	投稿者	投稿日時
[ism-study.40] Re^6: A Confirmation About Person	今井 祐之	1999/08/06 13:22:34
[ism-study.47] Questions About "Person"	今井 祐之	1999/08/18 11:39:53

今井さん、皆さん、こんにちは。

まずおわびですが、[ism-study.35]として投稿したものが、ふだん使っていないパソコンで、メーラも別のものを使ったら、ミスで、日付が狂っておりました。お手数ですが、探してご一読お願いいたします。

さて、対象総体を対象として労働する個人からの発生的連関を選択するという理論観、労働する個人の主体概念としての人格概念、実在する矛盾としての自己疎外、自己疎外における即自的な人格的自由の形成、疎外としての当為、交換過程論の人格規定、など、今井さんとはほとんど同じ問題設定で、しかしなお、ずれをお互い確認する形で、議論をつづけてまいりました。もしかしたら、読んで下さったかたがたは、プロレスや八百長試合をイメージされたかもしれませんね (笑)。

> おっしゃる通り、俺は類的本質=人格として把握し、類的本質=労働する人
> 格として把握するから、俺の議論では「人格が先にある」ということになるわ
> けです。そして、一言だけ補足すると——これは神山さんにも同意していただ
> けるはずですが——、「それも、労働においては、疎外されそれは否定されて
> い」とは言っても、正にこの否定された形態、正にこの疎外された形態にお
> いて産出されているわけです。それどころか、徹底的に自己否定し得るとい
> うこと、徹底的に自己疎外し得るといことこそが、類的本質のリアリティ (類

> 的本質の類的たる所以) であるわけです。

もちろん同意です。

> 但し、これは結局のところ、資本の生産過程の理解を前提するのです。自己
> 疎外した労働の振る舞い (第5章第2節以降) ——いやそれ以前に自己疎外し得
> る労働の振る舞い (第5章第1節) ——を前提しないことには、いくら俺が「物
> 象化するべき人格の生産関係とは類的本質の関係のことだ」と言ったところで
> 単なる断言であるのに過ぎません。で、これを前提した上で単純な商品流通を
> 捉え返してみよう——こういうわけなのです。

>

ここが、かなり議論を難しくした要因の1つだとおもいます。

>> 「結局、相互承認する1つの『交換過程というオープンな領域』なのだ
>>から、相互承認に先行する人間の振舞いを取出す意味はないのでは」とは
>>かんがえないわけですね。

>

> 考えません。俺の場合には、相互的承認の根拠とプロセスとが問題だからで
> す。

>

この「問題意識の問題意識」を今井さんは、価値形態論とのかかわりで論じて下さっています。ちょっと私の手に余るので、興味深かったという感想でここはご容赦ください。どなたか、今井さんに質問していただければ、たすかります。

交換過程に入った瞬間の事実上の自由な当事者・主体を、相互承認的・法的な人格の根拠としての人格としてとらえる、今井さんの立論は、私ももう少し考えてみて、吸収したいと思います (といっても実質的にはおたがいほとんど変わらない議論のようですね)。

[ism-study.40] Re^6: A Confirmation About Person

投稿者： 今井 祐之
 投稿日時： 1999/08/06 13:22:34
 修正日時： ——

元発言

表題： [ism-study.39] Re: Re^4: A Confirmation About Person

投稿者： 神山 義治

投稿日時： 1999/08/06 11:45:48

コメント

コメントはありません。

神山さん、ISM 研究会の皆さん、今井です。神山さん、論争の全体像をフォローしていただき、誠にありがとうございます。

>[ism-study.35]として投稿したものが、ふだん使っ

>ていないパソコンで、メーラも別のもを使ったら、ミスで、日付が狂っ

>ておりました。お手数ですが、探してご一読お願いいたします。

これはこちらの手許には既に着信しています。で、今朝の 09:00 頃にそれに対するお返事も送信したのですが、なんかいまだにメーリングリストを通じて配信されていません。まあ、もうすぐ神山さんのお手許にも俺のお返事が着信するはず。その中では、神山さんからの質問に対しては、不十分ながら、お答えするだけはお答えしておきました。着信するまでもう少しお待ちください。

>ずれをお互い確認する形で、議論をつづけてまい

>りました。

ズレがなければ論争にならないし、ズレが大きすぎても論争にならない——というところでしょうか。俺も神山さんが廣松主義者であつたら、あんな細か

いことには拘りません。問題意識を広く共有してその上で細かい点でズレがあるからこそ、俺としても、ダイレクトに問題意識をぶつける形で、細かいところに拘っているのです。

>この「問題意識の問題意識」を今井さんは、価値形態論とのかかわりで

>論じて下さっています。ちょっと私の手に余るので、興味深かったという

>感想でここはご容赦ください。

なにしろ、珍説ですからね。軽く聞き流してください。俺ももう少し考えて、頭を整理したいと思います。俺の見解もコロコロと変わることでしょう。

神山さんご存じのように、『経済学批判要綱』では、マルクスは価値形態論も交換過程論も物神性論も全部ごちゃ混ぜにぶち込んで論じているのですよね。あの問題意識にまで立ち返ってみよう——その後で物象化・物神崇拜・人格化の発生的関連の中で捉え直してみよう——というわけなのです。